

---

# 俺の屍を越えてゆけ～不敗行鳥神話～

天

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の屍を越えてゆけ〜不敗行鳥神話〜

### 【Nコード】

N5489L

### 【作者名】

天

### 【あらすじ】

時は平安、場所は京。

世間を騒がす悪鬼、朱点童子に挑むは一組の夫婦。  
しかし惜しくも夫婦は破れる。

そしてその一つ種に与えられたものは……

ゲーム「俺の屍を越えてゆけ」PS版のプレイ記録です。

PSP版も書きたいなあ。

戦闘、戦利品、交神の神など、実際のプレイ結果を忠実に反映させ

ています。

一族誰かの命の火が、儚く消え去った際には、どうか1つ、お線香をお願いします。

1018年?月(前書き)

プロローグ

1018年?月

彼女がはじめて自己を意識した時。

その自我の目覚めは、神の呼びかけによって起こった。

「勇者の血を継ぐ子よ、目覚めなさい」

大切な話があるので、そうして彼女に告げられたのは、朱点によって自らの血に科せられた、短命・種絶の呪い。

人より早く年をとり、人と子を残すことはできない。

呆然とする幼子に向かい、さらに神は告げる。

子を残せ、と。

我ら神と契り、勇者の血でもち、朱点を討て、と。

早急に突きつけられる選択。

彼女は火の神「焼津ノ若銚」と契った。

行鳥一族に 安らぎと栄光を

地上には 平和と繁栄を

『不敗行鳥神話』

1018年?月(後書き)

<おまけ>

・最初に入力する名前、生年月日等はなるべくあなた本人のものに  
しましょう!

その方が絶対後でいいことあります

・交神を行う神様は、はじめは大差ありません。  
顔で選びましょう(笑)

それでも迷った場合は、水の神様にしておくと、子供の体力のあがり  
がいいです。

1018年4月

<初対面>

「はじめまして、息子よ」

女当主は赤い眼で瞬きもせず息子をじっと見つめた。

「は、はじめまして」

その無表情に軽く狼狽するわが子に、当主は告げた。

「君の名前は朝若<sup>トモツカ</sup>だ。」

すでに親神から聞いてるかもしれないけど、我が一族は呪われてい  
る」

はあ、と朝若は頷いた。

「そこでだ。」

我が一族は打倒朱点だけでなく、全アイテム収集、不敗を達成する  
！しかもノーリセット！」

そこで初めて当主の声に熱がこもり、拳が堅く握られていた。

「のーりせ??」

「過ぎたことはどれだけ悔いても取り返しがつかないという事だ。

それくらいしてこそ、我が一族も輝けようというもの!」

はあ、と朝若はもう一度頷いた。

「わかつたら返事!」

キツと鋭い視線が飛ぶ。

「は、はい!」

朝若は首を落とす勢いで頷いた。

<相翼院>

「では早速レアアイテムゲットにしゅつつじ〜ん」

やけに軽く宣言する当主。

お手伝いのイツ花に言われて装備を変更する。

（ 1

はあ、と頷いた朝若は、当主に付き従って、京の都を出た。

「当主様、ご出陣〜！」

明るいイツ花の声に見送られて。

「京の出撃場所は相翼院！」

カツパをいぢめてアイテムゲットだぜ〜」

母の話す言葉は時々理解できない、と朝若は頂垂れた。

自分は勉強が足りないのだろうか。

神様に言われて案内人として来た、という透けた少年、キツト黄川人に挨拶を返し、鬼の巣窟に踏み入る。

小島とそれを繋ぐ橋を渡り、奥へ奥へと走る。

「は、母上、ちょ、ま・・・っ」

ぜえぜえと息をきらせる朝若。( 2

「ふむ、まだ術も覚えてないし、ゆっくり歩くか」

大将であるカツパに逃げられ、褒章品を持ち逃げられたりされつつも、二人はなんとか順調に討伐を続ける。

が。

「黄色にちつとも止まらない〜〜ッ」( 3

地団駄を踏んで悔しがる当主。

「まあ、初の出陣ですし」

苦笑する朝若。

うっかり人魚に白浪を喰らい、体力&健康度を削られたりしつつも、二人は無事ひと月を勝ち抜き、京の都へと帰還した。

「むう、この戦力ではさらに強い大将はまだムリそうだね〜」

ため息をつく当主。

何1つ術さえ覚えていないのに当たり前でしょう、との言葉を、朝若は必死に飲み下した。( 4



1018年4月(後書き)

<おまけ>

1

最初の装備は弱いです。

ちゃんとつけかえておきましょう！

2

走ると体力が減ります。

体力が8割を切ると、健康度も下がります。

健康度が下がりすぎると、死にます？

まめに体力をチェック、回復をおこないましょう。

3

黄色はまだゲットしていないアイテムです。

4

最初の出陣では何も覚えていません・・・。

くれぐれもムリはやめておきましょう！

1018年5月

<家族計画>

「我が一族の目標は！」

「打倒朱点！全道具制覇！不敗！」

自らの掛け声に続いたわが子によし、と頷く当主。

「それを達成するために、計画を練ってみた！」（ 1  
何やら紙を広げる。

1月 交神の儀

2月 相翼院

3月 春の選考試合

4月 鳥居千万宮

5月 交神の儀

6月 白骨城

7月 白骨城

8月 夏の選考試合

9月 交神の儀

10月 九重楼

11月 大江山

12月 大江山

「ただし今年の選考試合は負け戦が予想されるため出ないものとす  
る！」

情けないことを堂々と宣言する我が母親に、朝若は

（格好悪い・・・）

との思いを禁じえない。

「代わりに先月いけなかった鳥居千万宮ね」

広げられた紙を眺めつつ、はあ、と頷く朝若。

「んじゃここに貼っておきます！」

床の間の壁に堂々と貼り付ける。

「というわけで」

母はここでうふ、と笑った。

「今月私は交神の儀だから、邪魔しちや駄目よ、朝若」

一族を増やさないといけないからね！オホホ、と笑いつつ去っていく母親を見送りつつ、

(どうしてこんな人が自分の母上なのだろう・・・)

と思わずにはいられない朝若だった。( 2

<交神の儀>

白い着物一枚に着替え交神の間にやって来た当主を、儀式の衣装に身を包んだイツ花が迎えた。

「ささ、当主さま、どなたになさいますか？」

言ってカタログのように神様の顔写真の並ぶ冊子を手渡す。

それをろくに見ず、

「ん、鹿島 中竜さまで」

当主はあっさりと答えを返した。

「え、もつと奉納点(交神に必要な捧げモノのこと。鬼を倒して稼ぐ)の高い神さまになさっては？」

「いいの、ゆっくりと一族を成長させていくつもりだから、後から同じ神様に何度もお願いすることになってはいけないからね」( 3

柔らかく笑んだ当主に、そういうことなら、とイツ花は頷く。

当主より一步離れ、扇子と鈴を手に、神卸しの舞いを舞った。

まもなく現れる、金の角と眼を持つ、緑神の美形の神。

彼は笑みを浮かべ、座して待つ、当主の元へ歩を進めた。

鹿島 中竜「元気な子が生まれますよう」

1018年5月（後書き）

<おまけ>

1

このゲーム、計画は大事です！

無鉄砲な出陣、交神は、いつか自分の首を絞めます。

それはそれで楽しいでしょうけど（笑）

ちなみに交神は一年2度では少なく、3度では多いかなと思います。  
調節しつつやるのがいいんじゃないでしょうか。

2

できれば他のセーブデータから、養子をもらっておけば問題ないです！

3人もらって2人は出陣、一人は子供のお世話をしてもらうといいでしょう。

討伐に出なくても忠誠心が下がらないように、また一族が増え、家が狭くならないように、年のいった方がオススメです。

また養子にもらった強い方々に子を残させると、後々家をのつとられる恐れが・・・気をつけましょう（笑）

3

同じ神様と何度も交神していると、血が濃くなりすぎ、短命な子になる恐れがあるそうです。

まあそれとは関係なく、私は色々な神さまと交神したいだけなんですけど（笑）

できればなるべく奉納点の高い神様と子をつくり、強い子を残していきましょう。

しかし奉納点の消費も計画的に！

あとで交神したいのに奉納点がない！？（・・・ってことだけはないようにしましょう。

1018年6月

<白骨城>

「い、痛いじゃないの、朝若！」

「ええっ突っ込んで行ったのは母さんでしょう!？」

体力200ほどの二人に、40ほど一撃で与えてくれる鬼。

元は朱点に挑み、散っていった侍たちだと言う。

夏のみ、その彷徨える魂の住みか、白骨城はその姿を現すのだと、

黄川人が言っていた。

「相変わらず黄色こないし」

がっくりとうな垂れる当主。

それは運が悪いだけでは、という言葉を朝若は飲み込んだ。

「健康度もがんがん減っちゃうねー城の中はちよつとまだ辛いね」

( 1

「そうですね」

「時間もあと少しか・・・もうちよつとしたら、帰りますかね」

城から出ながら当主は剣を再度構えた。

時間ぎりぎりまで粘る。

少しでも、何か得て戻れるように。

それが道具でも巻物でも、経験でも・・・後に残してやれるように。

( 2

<初対面>

「鹿島 中竜さまより、お子様をお預かりしてきました！」

イツ花が床の間に足音も軽くやってくる。

「おー」

当主と朝若は揃って声をあげ、イツ花へと視線をやった。

「そのへんの男の子よりずっとたくましい女のお子様です」

イツ花に続き入ってきたのは、水色の髪を桃色の大きなりボンでまとめた幼子だった。

大きな緑色の瞳は生き生きとした輝きを放ち、確かに黙っていても元気の良さを伺わせた。

「はじめまして、お母様、お兄様」

礼をしてにこつと笑う姿は大変に愛らしい。

「当主さま、お名前をつけてあげてください」

イツ花の言葉に頷いて

「そうね、あなたの名前は竜香たつかよ。

これからよろしくね、竜香」( ) 3

当主はにこりと笑みを返した。

1018年6月(後書き)

<おまけ>

1

ダッシュ時と同じく、体力が大きく減少した状態で行動すると健康度が下がります。

回復が先に来て体力が戻った状態で行動順が回ってくれば、健康度に影響はありません。

2

ですが引き際を間違えては大変です！

うっかり全滅、誰かが倒れて撤退、とはならないよう、残りの技力、アイテムと相談して探索は行いましょう。

3

今回私は両親から名前をとって命名しています。

ランダムで名前をつけてくれる機能もありますので、名前を考えるのが苦手な方はぜひご活用を

1018年7月

< 出発前、家の前にて >

「さて、今月も予定通り白骨城よ！」

高らかに宣言する当主に、この人はやはり無駄に元気だな、と朝若は思わずにはいられない。

「竜香、悪いけど一人でお勉強していてね？」 ( 1

しかしまだ幼い長女の頭を撫でる姿は、うら若い乙女のような見目であつても母親だつた。

「はい、お母様、お気をつけて」

応じて頷く少女は愛らしく、思わず戦支度をした二人ともが笑みを浮かべる。

「では行つてきます」

「いつてらつしやいませ」

玄関で手を振るイツ花と竜花に見送られて、二人は家を後にした。

< 白骨城 >

「あ」

鬼の巢窟に踏み入るなりそう声をあげた母親に、朝若はうかがうような視線を投げた。

「やったわよ、朝若！熱狂の赤い火よ！」 ( 2

「え？」

「え、じゃないの、いい品が手に入りやすくなるのよ！

そうとわかれば城まで走るわよ！」

「ええ？」

先月城の中はきついと言つたばかりじゃ、と言つ暇さえもらえず、駆け出した当主の後を追うはめになる朝若。

「よーしこの階の敵を倒すわよ！」

そして巻物げつとよ！」



「はあ」

熱狂の赤い火、とやらで俄然やる気の出たらしい当主は、目的地につくと物凄い勢いで鬼を屠りだした。

これほどの力、どこから出てくるんだ、と少し引いたその息子は、その原因に思い至りげっそりと肩を落とした。

何のことはない、物欲だ。

しかし、勢いが良すぎたらしく、肝心の熱狂の赤い火の時には、周囲に敵がいなくなってしまうていたのだった……。

（ 3

1018年7月（後書き）

<おまけ>

1

生まれた子は2ヶ月はお家でお留守番することになります。  
誰か指導してくれる人がいるときには、その人と共に訓練、誰もいなければ一人で自習することになります。  
訓練を行った方が俄然能力値はアップしますので、できれば指導を行ってあげましょう。

2

レアアイテムと通常アイテムのゲット確率が逆になる期間のことです。

その期間に合わせて欲しいアイテムをもっている敵がいる場所まで出来る限り移動しましょう

3

そしてうっかりその期間がくる前に敵を倒してしまわないようになしましょう（T T）

1018年8月

<京の町>

「おじさん、この剣と薙刀、こっちの兜も頂戴！」

「毎度」

生き生きと買い物をする当主。

そのすぐ隣できよるきよると物珍しげに周囲を見回している竜香。

そこから一步離れて、朝若はそんな二人を見るとはなし、見ていた。

「はい、じゃあ朝若これ持って！」

「え、届けてもらうんじゃ？」

狼狽する朝若にぎゅむとばかりに剣と薙刀を押し付ける当主。

「武器はすぐ試したいでしょ！」

おじさん、防具はお願いな〜と語尾に「はあとまあく」、でもつけ

そんな愛想の良さで店の親父に再度向き直る。

「それじゃ、帰りましょ」

「はい、お母様」

機嫌よく店を出る当主と竜香に、重い剣と薙刀を抱え従いながら、

今日は自分の元服祝いの買い物だったはずでは、と複雑な気分を覚

える朝若だった。( 1

「でもあれね、品揃えがやっぱりいまひとつよね。

京の町も、朱点のせいで寂れているからね・・・」

店を出るなり顎に手をあて、当主はため息をつく。

「私たちも復興のためできることをしなくてはね」( 2

「はい、お母様」

優しく微笑む母親に、竜香も笑顔で頷いた。

<鳥居千万宮>

竜香には自習を言いつけ、当主と朝若は鳥居千万宮に来ていた。

「なんだか変わった場所ね〜どっから先へ行けばいいのかしら」

赤い鳥居をぼんぼんと軽く手のひらで叩きながら、当主はこぼした。  
「そうですね」

応じて周囲を見渡す朝若の耳に、  
「おわっ!？」

という当主の間の抜けた声が届いた。  
振り返ると、当主の姿はそこにはなかった。

「母さん!？」

慌てて大声を出し、周囲を見渡す。

鬼の気配はなかった。なのに何故!

焦る朝若の前に、唐突に当主の姿が現れた。

「母さん!？」

「この鳥居で移動できるみたいよ」  
太平楽な笑みに、どっと力が抜ける。

「ここは行き止まりみたいだったから、他の鳥居をくぐってみま  
しよ」

「はあ」

力の抜けたまま、当主に付き従う。

次に潜った青い鳥居もまた、行き止まりだった。

しかし、緑の鳥居を潜ると広い場所に出た。

その場所でもまた、鳥居を潜る。

そしてまた、緑が当たりだった。

「ふむ」

顎に手をあてる当主。

「今日は緑でいいみたいね。いつもそうかはわからないけど」  
「そうですね」

「ちょうど4つあるし、もしかしたら季節毎かもね」

えへと笑う当主に、そんな安直な・・・と思う朝若だったが、実  
的を射てしまっているのだった。( 3

## 1018年8月（後書き）

<おまけ>

1

生後8ヶ月で元服を迎え、大人の仲間入りです。  
具体的に言えば、交神できるようになります。

わお、とってもオトナ（笑）

2

朱点率いる鬼たちのせいで、京の町はとっても寂れてます。  
ゲーム中見れますんで見てみてください。

とっても穴だらけ（^^）；

京の町復興のため、私財をなげうってでも投資しておきましょう！  
投資すれば売ってある商品もよくなるし、いつか自分に返ってきてま  
す。

3

3～5月が赤

6～8月が緑

9～11月が黄色

11～2月が青です。

5行の色???

1018年9月

<行鳥家居間>

「ただいまあ」

「ただいまです」

共に帰った母娘に、食卓に座して巻物を眺めていた朝若が

「おかえりなさい」

と応じる。

「京の町はどうでした？」

「まあ先月行つたばかりだしね、そう変わり映えしなかつたわ」

「でも、お母様が投資してくださつたお陰で、きつとよくなるだろ  
うつておつしやてました！」

頬を染めて嬉しげに語る竜香。( 1

「よくなるといいね」

愛らしい妹に微笑んで頷く朝若。

「はい！」

元気よく返事をした娘の頭を、当主が撫でた。

「んで朝若は何やつてるの？」

「はい、先月手に入れた呪文を覚えようと」

幻八の巻物を示す。( 2

「ああ、それね。まだ覚えてなかつたの」

「え？」

「私は地鳴りも幻八ももう覚えちゃつたわよ」

「ええ！？」

「つてわけで交神いつてきまゝす。

朝若、竜香をよろしくね」

前回に引き続き、何故かオホホホと笑いながら軽い足取りで居間を出て行く母親に、何故あの方が、思わずにはいられない朝若だった。

結局この月、朝若は地鳴りは習得できたものの、どうしても幻八を理解することができず、悔しい思いをすることとなった。

<交神の間>

「どの神様になさいますか？」

「黒曜斎 影彦さまで」

神様一覽をみるまでもなく、当主は即答を返した。

「奉納点の低い神様で本当によろしいんですか？」

「ええ、茶々丸さまも可愛らしくて素敵なんだけど、私を争って三つ巴になった時、あまりにお可哀想でしょう？」

誰もそんなことは聞いていない。

よくわからないながら、イツ花ははあ、と頷いた。

「では神様をお呼びいたしますね」

一歩当主より距離をとり、神卸しの舞を舞う。

ほどなく当主の影より、すう、っと姿を現す、黒衣の男。

影よりなお暗い、長い漆黒の髪を当主の頬へさらりと零し、男は言った。

「では、参られよ」

1018年9月（後書き）

<おまけ>

1

復興投資することで、京の町は段階的によくなっていきます。  
手始めにまずは商業部門に500投資することで、お店に並ぶ商品  
の数が増えます。

2

呪文の巻物は持ち帰りさえすれば、技力の足りる人は自動的に覚え  
てくれます。

朝若は「幻八」、おぼえれませんでした（笑）



1018年10月

<行鳥家にて>

「今月から竜香も討伐隊参加ね」

「はい、お母様、私足手まといにならないよう、頑張ります！」

「そんなに気張らなくて大丈夫だよ。」

初陣なんだから」

親子ほのぼのと会話しながら、戦支度を整える。

竜香だけは緊張のため、がちがちだったけれど。

「竜香は弓使いだし、後衛だから大丈夫。」

僕たちが守るから」

かくかくと頷いた竜香に、兄である朝若が優しく話しかけたが、竜香はふるふるとう首を左右に振った。

「いえ、お兄様、私、邪魔にはなりたくありません。」

竜香に構わず、鬼をお倒してください」

思わぬ返事に、朝若は目を丸くする。

この子は意外と芯が強いのだろうか？

元気はある子だけれど、ぼうつとしているところをよく見るせいか、控えめなコだと思っていた。

「あはは、竜香にも期待してるわよ、それじゃあ行こうか！」

軽く笑った当主に促され、朝若と緊張に強張った竜香も、玄関へと向かった。

<九重楼>

「あ、熱狂の赤い火！！」

「え??？」

唐突な母親の声に、竜香が窺う視線を投げる。

「いいアイテムが手に入りやすくなるんだよ」

それに朝若が答える。

「うふふ、今月は竜香もいることだし、塔までいくわよ!」  
慣れた朝若はあっさりと、竜香は恐々頷いた。

そうして駆け出す三人。

熱狂の赤い火の一つ前で、塔の門へとたどり着いたのだった。

しかし、門を開けるなり、漂い来る強い気配。

「何か、いそうね」

ゆるんだ顔が標準の当主も、顔をひきしめた。

「恐らく、門番ではないでしょうか」

朝若の言葉に頷く。

「竜香は初陣で辛いかもしれないけれど、行くわよ」  
恐る恐る、塔の入り口へと向かう、三人。

その足が扉へと続く階段へ降りる、そう思った瞬間。

「ごうつと渦巻く炎。」

扉の前に瞬時に生じた炎は、黒い数珠を首に巻いた、赤い肌をした  
ふくよかな体の鬼を生んだ。

『ほっほっほー』

高らかな笑い声と共に、鬼は三人に襲い来る。

その印象はともあしきものには思えなくて、竜香はとまどったま  
ま戦に応じた。

斬っても斬っても、七天斎八起なるその鬼は、「お雫」という回復  
の術を使い、その体力を回復してしまう。

転じてこちらは、「泉源氏」という「お雫」より少量回復の術しか  
なく、相手は火炎の術を放ってくる。

当主は苛立っていた。

「えーい、朝若、私に「武人」重ねかけ!」( 1

片手で浴びせ降る炎を防いだ当主が叫ぶ。

「竜香は道具でみんなを回復!」

攻撃力を一時上昇させる術、「武人」をまだ使えない娘にはそう指

示し、自らそれを唱えた。

「はい！」

続く朝若も「武人」を唱え、竜香は二人を回復しようとおわあわと道具袋から常盤ノ秘薬を取り出した。

「いっくわよー！喰らいなさい！」

大きく袈裟懸けに切り裂く。

その大きく開いた傷に、一撃とはいかなかったが、当主は手ごたえを感じた。

「お栗」で回復されても、その傷は全て癒されない事に、当主は確信を抱く。

「次で決める！」

娘の使う薬に火傷の傷を癒されながら、叫ぶ。

「武人」！

息子の唱える呪文。

勝利を確信し、にやりと当主は笑った。

水色の髪を鬼の炎から生じる風になびかせ、赤い目を細めて笑うその姿は、

(どちらが鬼だかわからない)

と息子を怯えさせる。

果たして斬りつけた当主の剣は、達磨のような赤い鬼を再び切り裂き、地に倒したのであった。

消え行く鬼ににこりと笑った当主が告げる。

「朱点に従うがあなたの不幸」

何度復活しようとも、我が一族に滅ぼされるのみ。

こうして行鳥一族は、初の副将討伐に成功したのだが。(

2

「あーーーーー!!!」

「ど、どうしたんですか！」

思わぬ母の絶叫に、息子は大いに怯え、

「ど、どこかお怪我でも!？」

娘は大いに動揺した。

「火、火が。」

熱狂の赤い火が消えてるうー！！！！」  
うわあんと嘆く当主。

- - 余り感動はないようだった。

1018年10月(後書き)

<おまけ>

1

七天斎八起には攻撃力のある人に「武人」を重ねがけし、一撃で倒す勢いで行くのがオススメです。

理由は上述の通り！

2

最初に倒す中ボスは、七天斎八起がオススメ。

一番弱く倒しやすいボスだと思います。

1018年11月

<寒さが忍び込み始めた頃、行鳥家居間にて>

寒がりの当主命令で炬燵を用意していた一家の元へ、イツ花が駆け込んできた。

「当主様、神様の元よりお子様をお預かりしてきました!」

「おー」

炬燵布団に丸まった当主が声を上げ、炬燵の台を運んでいた朝若と竜香が振り返る。

「お子様?」

兄を見上げて尋ねる。

「そう、僕らの妹か弟だ」

にこやかに答える朝若だったが、弟だといいなあ、と思っていた。でないとなんだか、肩身が狭い。

「お喜びください!女のお子様です!」

イツ花の言葉にちよつとがっかりする朝若。

嬉しそうな竜香。

イル花の言葉に続き入ってきた幼子は、長い金の髪を無造作に垂らし、健康的な小麦色の肌をした、どこか野性味を帯びた少女だった。

「あら」

当主は口元に手を当てる。

「野生味が私、ちよつと一歩おいてる感じが黒曜齋さまそっくり」  
笑いながら近づき、小さくなっていてる幼女の頭を撫でた。

「いらつしゃい、ここがあなたの家よ。あなたの名前は影香。  
私の跡を継いで、剣士となつてね」

幼子はこくりと頷いた。

<相翼院>

影香に自習を言いつけ、三人は相翼院へ来ていた。

「今日はちよつと無理して奥へと行くわよ」  
きりりと表情をひきしめる当主。

いつもと違うものを感じて、子供たちは無言で頷いた。

「場所は天女の小宮左2、「陽炎」の巻物取得を目指します」( 1  
「え」

朝若は思わず口を挟む。

天女の小宮左など、これまで行ったこともなかったのだ。

母はどうしてそんなところを知っているのか。

ましてやそんな巻物ができることなど・・・

「いつもウソばかりつく隣のお侍さんが言っていました！」

「イツ花の物まねはいいですから！」

朝若の疑問を読み、なおかつ物まねでボケる母に即座に突っ込む。

「復興のための投資とかしてるせいかな、みんな色々教えてくれる  
のよ。」

まさに情けは人のためならず」( 2

穏やかな笑みを浮かべた母に朝若は言葉をなくし、竜香は嬉しげに  
微笑った。

「では行きますか！」

しかし健康度を減らしながらも必死に戦ったこの月、一同は目的の  
巻物を取得することはできなかった。

しかし努力のはいはあり、「怒槌丸」、「蛇麻呂」の2つの巻物を、  
京へ持ち帰ることが出来たのだった。

1018年11月（後書き）

<おまけ>

1

討伐は計画的に！

無計画に突っ込むより、目的を持って討伐に向かう方が有意義な上、成功不成功に関わらず楽しめると思います。

2

そんな事実はありません（笑）

実際はこうりゃ・・・うげほげほっ！



1018年12月

<京の町、復興支援に訪れる>

「こんにちは、棟梁！」

「こんにちはあ！」

「おお、行鳥家の嬢ちゃん達、いらっしやい」

威勢のいい声に続く、手をつないだ少女と幼子の声に、大工の棟梁は相好を崩した。

「こいつあかわいらしい。嬢ちゃんの妹かい？」

「何言つてんの棟梁！二人とも私の娘よ」

あはは、と笑った行鳥家当主に、棟梁はさらに大声で笑って返した。

「冗談言っちゃいけねえ、嬢ちゃんとても子持ちにや見えねえよ」

本当に娘な姉妹は、顔を見合わせた。

「冗談じゃないよ、本当に娘よ。ついでに後一人いるのも私の息子よ」

両手を腰に当て、威風堂々、何も嘘はついちやいない、と全身で表現せんばかりの当主に、棟梁は目を丸くした。

「こりやまた・・・嬢ちゃんあんた本当はいくつなんだい？」

思わず尋ねた棟梁に、当主は悪戯っぽく笑む。

「一歳四ヶ月」

<九重楼>

「今月も、ちよつと無理するよ」

不敵に笑みつつの当主の言葉に、朝若、竜香は神妙に頷いた。

「目標は九重楼六階、「お地母」の巻物。

なるだけ鬼は相手にせず、早々に到着することを目指します」

「了解しました」

「わかりました」

了承を告げ、頷く兄妹。

満足げに頷いた当主は高らかに宣言する。

「じゃあ走るよ！」（ 1

三人は坂道を駆け上がり、ひたすらに塔を目指した。

先々月門番を見事打ち倒したため、すんなりと塔へと入り込む。

そうして辿り着いた六階。

しかし今月も運悪く、「くらら」の巻物を手に入れたものの、目標を達することはできなかったのだった。

「残念でしたね」

話しかけた息子に、母は笑みを返した。

「でも、行き方、手に入れる方法はわかったでしょ？」

また今度、あなた達が手に入れてくれればいいのよ」

穏やかな母の笑みに、何故か胸騒ぐものを感じる朝若だった。

1018年12月(後書き)

<おまけ>

1

目的地まで急ぎ向かうことはよくあるでしょう。

しかしこのゲーム、ダッシュで体力が失われます！

敵にあつたはいいが瀕死だった、なんてことだけはないよう、まめに体力は確認し、回復しておきましょう。

健康度が減少するほど体力が低下すると、「健康度注意」と表示される親切機能もついています

(でもできればその前に回復しておきたいところ・笑)

1019年1月

<正月祝う行鳥家炬燵にて>

「みんなに謝らなきゃいけないことがある！ごめん！」

年明けの挨拶を一通り済ませ、和やかにイツ花の力作お節をついでいると、突然当主が頭を下げた。

何事かと当主に注目し、動きを止める一同。

「実はリセットしてしまいました！」（ 1

頭を下げたままの当主の言葉に、

「りせつと？」

竜香は首を傾げた。

「え、何故ですか？討伐にも出ていなければ、負傷もしていないのに」

それと同時に問いただす朝若。

「それは写真とりにいくの、忘れてたからよ」

当主はゆっくりと面を上げた。

「写真？」

竜香はさらに首を傾げる。今月で討伐部隊に入れるほど、大きく成長した影香は、お椀を片手に黙って成り行きを眺めていた。

「そう、幻灯屋の記念撮影！」

これをやらずして行鳥家の正月は、いや一年は語れない！！」（ 2  
握り拳を握り、すつくと立ち上がる当主。

「それは打倒朱点の次に、重要だと言っても過言ではないわ！

てことで行くわよ、みんな、京の町へ！！」

大げさな身振りで促す。

はあ、と頷く朝若。

「え、まだご飯・・・」

戸惑う竜香。

無言で影香は、お椀の中身をかき込み始めた。

<写真撮影を終えて、行鳥家居間>

「あ、影香ちゃん、ここにいたのね」

ととととやってきた姉に、居間から庭に面した縁側で素振りをしていた影香はこくりと頷いた。

「寒いからここでやってるの？」

竜香の問いに、ふるふると首を振る。

「雪、綺麗だから。降りると、汚しちゃう」

庭に降り積もり、木々も、草も、全てを白く染め上げたそれに目をやり、竜香も目を細めた。

「そうだね、とっても綺麗だね」

素振りの手を止めた影香は、姉にゆっくりと語る。

「地上は、とても綺麗。お父様の所は、暗くて、こんなに綺麗なものがあること、私は知らなかった」

「うん。影香ちゃんが来た頃は、紅葉が綺麗だったね」  
思い出すように、竜香は笑った。

短い一生を生き、鬼を倒す業を負った彼女たちは、次の年の紅葉を、積雪を、目にするのが保証されてはいなかった。

「遠くの山が、真っ赤で、とても綺麗だったの。  
ずっと見ていると、空まで赤くなって。」

私、お母さんに聞いたの。

どうしてあんなに真っ赤なのって」

姉妹は縁側に並んで座り、なおも降り続く雪を眺めた。

はらはらと降り積もる雪は、そんなことがあったことさえ消し去るように、その山さえ白く染めていた。

「最後の命を燃やしているからよって教えてくれたの。」

だからあんなに赤くて、美しいのって」

紅葉した木々はその葉を落とし、日は沈む。

そしてまた春に、朝に、新しい命を育むのだ。

「そうなんだ」

竜香は山に目をやった。

今は真白なそれが、赤に彩られていた時の事を、思い描いた。

「お母さんも綺麗だよね」

影香は姉を見上げた。

竜香は、山を見ていて、その表情を見なかった。

「そうだね、お母さんも、赤がよく似合うね」

竜香は微笑んで、母の赤い瞳を思い描いた。

「私、お母さんの傍にいたくて、道場じゃなくて、ここで訓練していたの」

雪は、降り続いていた。

彼女たちの母親は、炬燵でこんこんと眠り続けている。

<交神の間にて、戸惑う男一人>

「さあどうされますか、朝若さま」

巫女服に着替えたイツ花がせかしてくる。

朝若は暑くもないのに額に汗を浮かべた。

「どうする、と言われても」

神様一覽を手に、イツ花から一步身を引いた。

「そんなこと言ってる、イツ花が勝手に決めちゃいますよ！

孔雀院 明美さまとか」

それはオカマの神様だ。

「や、やめてくれ！

こ、この最初の彼女で！」

朝若はさすがに必死の勢いで指をさし、神様一覽をイツ花に押し付けた。

「飛天ノ舞子さまですね。

それではお呼びいたしまーす」

何事もなかったかのように、イツ花は鈴を鳴らし、舞を舞いだす。

ホツと息をついた朝若の肩に、ふわりと何かが舞い降りた。  
目をやると、それは桃色の鳥の羽だった。

反射的に上を見上げた朝若の目に、舞い降りる天女の姿が映る。  
背から生えた桃色の翼をゆったりと動かし、緑の薄絹を風に遊ばせた美少女。

飛天ノ舞子は朝若を認めると、笑みを浮かべた。

「雲の上まで連れてってあげるね」

- 朝若が本当に雲の上まで行ってしまったかは、本人のみぞ知る。

1019年1月（後書き）

<おまけ>

1

しちゃいました（笑）

すみません！！m（T T）m

2

幻灯屋で記念撮影を行うと、一族の歴史で見れるようになります。

これまでの家族を、その歴史を残し、あとで懐かしむことができるように、ぜひ写真は撮っておきましょう。

天は1月に必ず撮影するようにしています。

忘れるの防止と、1年1回なら（不慮の事故がない限り）必ず全員映れるためです。

まあ今回は初回なので忘れてしまっていたわけですが（T T）



1019年2月

<戦仕度を整える当主の部屋にて>

「当主さま！」

慌しい声を上げ、当主の部屋のふすまをイツ花が開いた。

「ん？」

鎧の肩当を留めていた当主が振り返ってみる。

「大変です！床下でネコが子供を産みました！」

「おお、それは目出度いね！」

イツ花の言葉に破顔する当主。

それを上目遣いに見て、イツ花は申し出た。

「あの〜飼ってもいいですか？」

「勿論」

か？、と言うか言わないかのうちに戻される即座の返答。

イツ花が歓声をあげる。

「ありがとうございます、当主様！」

全身で喜びを表現した彼女は、自分の声にかき消され

「かくて命は巡る、か」

という当主の呟きを聞き逃した。

「え？」

聞き返す彼女に、当主は笑みを向ける。

「いやいや、武器防具買い物してきたから、後で倉庫に入れとい

ね

「はいー！」

良い返事をして、イツ花がぱたぱたと来たときと同様に、慌しく去って行く。

当主は、ため息を一つ落とした。

<鬼討伐に旅立つ一家、見送るイツ花>

「じゃあ今月は相翼院へ行くよ。」

前回到引き続き、「お凜」、加えて「陽炎」の巻物を狙う子供たちは真剣な表情で頷いた。

「影香は初めてで大変だけど」

母の視線を受け、剣士となった少女は、こくりと頷く。

「母さんと僕が前衛で、影香には後ろにいてもらいましょう」

「そうね。竜香、面倒みてあげてね」

息子の言葉に頷いて、視線をもう一人の娘へと向けた。

「はい」

弓使いの少女はそう答えて頷く。

そこへおずおずと、イツ花が声をかけた。

「あの〜当主さま」

「ん？」

笑顔で振り返り見る、当主。

「体調が優れないようなので、お気をつけくださいね？」

「何言ってるの、いっぱい寝たし、大丈夫よ」

イツ花の心配を笑い飛ばし、当主は号令をかけた。

「では。いざ、出陣！」

いつも通りのその様子に、イツ花の杞憂か、と朝若と竜香は、気にも留めなかった。

しかし、影香はずっと、不安げな視線を母へと向けていた。

それが初陣のためではないことに二人が気がつくのは、一月の討伐を無事に終え、家へと帰り着いてからの事だった。

<二月の終わり、雪の舞う中>

「ただいまー」

4人の無事を知らせる声に、イツ花が喜び玄関へと駆けつける。

「おかえりなさいませー！」

先じて家へと踏み入った当主に向け、イツ花がいつも通り戦果を尋ねる声をかけようとする。

が、開かれた唇は別の言葉を吐き、表情は驚きに強張った。

「あのオ、ちよっとお顔の色が・・・ああッ！」

当主は倒れこみ、そのまま意識を遠くした。

「当主様に残された時間は、もうわずかしかりません・・・」

当主の部屋で、床へついたその主に向け、イツ花は表情を曇らせたまま、そう告げた。

告げられた相手は、穏やかな表情を浮かべていた。

「最後に新当主ご指名の任、立派に果たされますよう、お願い申し上げます」

当主は一つ、息を吐く。

そうして、答えを返した。

「朝若に、お願いします」

了解の意を表し、無言でイツ花は頭を下げる。

「もうひとつ、お願いがあります」

「何かな」

とても死の間際とは思えぬ穏やかさで、布団の主はイツ花を促す。

「当主様のお名前を、代々継ぐことをお許しく下さい」

軽く目を丸くする当主。

「いいけど、みんな突拍子もないことばかりするようになるわよ」  
やがて笑ってそう告げた当主に、無言でイツ花は、再度深く、頭を下げた。

それを見届けた暖かな眼差しを、天井へと向けて、

「・・・あと少しで、孫にも会えたのに、残念だわ」

独り言のように、そう漏らした。

「こんな呪いを受けた身だから、そう期待はしていなかったけれど、  
本当にあと少し、だったのにね」

朝若の子供は、あと数日でこの家へやってくるだろう。

「少し、無茶をしすぎたかな」

小さな笑い声をたてる当主に、イツ花は返す言葉を持たなかった。

「でも後悔はしていないの。あの子たちに、道を示してあげられたから」

柔らかな笑み。イツ花は、とても目にしていられなかった。

涙を零してしまっ、その前に。

「名残はつきませんがこれにて失礼いたします

長い間のお務め ご苦労様でした」

深々と頭を下げ、イツ花は当主の部屋を、逃げるように退いた。

入れ替わりに、部屋へ入ってくる子供たちを、当主は笑顔で迎え入れる。

そして間近に座る子供たち一人ひとりの顔を見て、ゆっくりと話し出した。

「お雫と陽炎、とれなかったね」

今月も目標は、達成できなかった。

「あなたたちに、残してあげたかった」

朝若は神妙な顔をしたまま、無言で項垂れた。

竜香がこらえきれず、すすり泣きを漏らした。

影香は目元を赤く染めていたが、母をじっと見つめるばかりだった。

「でももう、大丈夫よね？」

私がいなくても、やり方、わかったよね」

布団から出ている細い母の手を、朝若はしっかりと握り締めて答えた。

竜香は、泣きながら何度も首を縦に振った。

「良かった・・・」

当主は、ほっとしたように、深い息をもらした。

「朝若、後は、お願いね。

もう父親になるのだから、しっかり。

妹たちを、守ってあげるのよ」

息子がしっかりと頷き、娘たちが強い眼差しで自分を見つめていることを知り、当主は満足げに頷いた。そうしてゆっくりと、その目を閉じた。

いつも前を向いて 歩いて行くのです

どんな悲しみにも 負けちゃダメ

さあ、子供たちよ

私の屍を 越えてゆきなさい！

- 外には雪が、しんしんと降り続いていた。

1019年2月（後書き）

<おまけ>

こうしてあなたの分身は、ごくあっさりと死んでしまいます。

しかしあなたが残した血は、鬼を倒す術は、脈々とその子孫へと受け継がれていくのです。

あなたの子供の、孫の、そのまた先の子供たちのために、便利な呪文を手にいれ、強い武器をそろえ、鬼の弱点を書き記し、残していつてあげてください。

1019年3月

<線香の香の漂う、行鳥家居間>

初代当主と入れ替わるように、一族に新たな一員が加わることとなっていた。

その日居間に勢ぞろいした一同。

当主になったというのに、朝からそわそわと落ち着きがない朝若に、竜香が尋ねる。

「お兄様、名前はもう決めてるの？」

「ああ、男の子だったら飛若、女の子だったら若子にしようかとよくぞ聞いてくれたとばかりに答える朝若。

その様を茶をすすりつつ見ていた影香が、ゆっくりとした調子で言った。

「女の子ですよ、兄さん」

え、と振り返る兄。

ずっと影香はもう一度茶をすすった。

そこへちよつど戻ってきたイツ花が、居間に勢ぞろいした一家に向かい、笑顔を向けた。

「当主様、お子様をお連れしました！」

お喜びください。

賢そうな女のお子様です」

影香の顔に、兄と姉が反射的に視線をやる。

何事もなかったような顔をした影香は、イツ花の背後に目をやっていった。

その後ろから、そっと現れた幼子が、ぺこりと頭を下げ、居間に居る三人の顔を見回した。

視線の意味に気づいた朝若が、そっと近づく。

「僕が君の父親だよ。」

よろしくね」

穏やかに笑んで、わが子の頭に手を置いた。

「おとーさま？」

純粋な瞳を向ける幼子に、ゆっくりと頷く。

「おとーさま」

嬉しげにきゅっと抱きつくわが子を、抱き返す朝若。

それを見る面々の顔に、微笑みが浮かんだ。

兄妹の母の死以来、久々に浮かべられた、自然な笑みだった。

「君の名は、若子だよ」

「はい、おとーさま」

無垢な笑み。

一同は心癒される思いを味わった。

<未だ寒さの残る相翼院>

若子に自習を言いつけて、兄妹たちは、相翼院へと来ていた。

今月こそ、母の目指した「陽炎」と「お凜」の巻物を、手に入れ、墓前に供えるつもりであった。

気負う三人の前に、道先案内人を名乗る少年、黄川人が、その姿を現す。

調子はどうかと、気楽に尋ねてくる少年。

三人は、答えることができずに、無言を返した。

励ますように、その身の透けた少年は、続ける。

「気長にいこうよ、人生は長い・・・」

黄川人の勢いのいいその声が、何かに気づいたように尻すぼみになる。

勇ましい戦装束の行鳥一族は、その身を強張らせていた。

「あッ、ごめん」

そういつつもりじゃなかったんだ・・・

じゃ、またね」

逃げるように立ち去る少年。



短い生涯を閉じたばかりの母。

そしてわが身。

突きつけられた現実には、一同の間に、重い空気が落ちた。

その月、一族は、「白浪」の巻物を手に入れたものの、目指す巻物は、手に入れることができなかった。

母と最後に訪れたその場所で、兄妹は、知らず、誰からともなく、母の話始めていた。

「・・・母さん、最後の月まで、強かったな」

死の間際にあつて、衰えていないはずなのに、その攻撃力はやはり軍を抜いていて、そして呪文も完璧だった。

だからこそ、影香はともかく、朝若も、竜香も気付けなかったのだ。

「そうだね・・・」

無理をするなど言うことも、心配をすることさえも、許されなかった。

今もこうして鬼の住処でぼうと立ち尽くしていれば、自分たちを叱り付け、檄を飛ばし、勢いづけさせる母の声が聞こえてきそうなのに、その姿はどこにもなかった。

当主の指輪は、既に母の手から譲られ、朝若の指にある。

それが母の死の証でもあるように感じられ、知らず朝若は、指輪のある手を、きつく、握り締めていた。

1019年3月（後書き）

<おまけ>

一人いなくなるだけで、戦力ががた落ちしてしまうことがあります。特にそれが、歴戦の兵であれば尚更です。

先月は大丈夫だったからといって、今月も大丈夫とは限りません。常に戦力に見合った戦略、戦場を考えましょう。

1019年4月

<庭で草木が微笑む頃、行鳥家>

両の耳元でゆるく結んだ緑の髪を垂らし、若子は仏前で両手を合わせていた。

毎朝こうして祖母に手をあわせてから訓練に入るのが、彼女の日課だった。

「おばーちゃま、若子が強くなれるよう、どうか見守っててください」

今日も熱心に頭を下げる彼女の背後に、後からやってきた影香が立つ。

気付き振り返った若子は、叔母に笑顔を向けた。

「初めて若子が先でしたね」

元はといえば、影香が日課としていることを、若子が真似たのだった。

心持嬉しそうな姪に、笑顔を返すことで答えた影香は、若子が譲った仏壇の前へと座す。

今日は母に相談したいことがあって、わざと時間をずらした事を、影香は告げはしなかった。

ぱたぱたと廊下を去っていく若子の足音を耳に、影香は目を閉じ、両手を合わせた。

「母さん、時々、私は見えすぎるこの目が疎ましい」  
伏せられた目蓋の奥、わずかに力が籠った。

「あの子はとても強くなるでしょう。」

けれど兄さんは、それを見ることは叶わない・・・」

悲しい予言を口にした影香は、薄い目蓋を震わせた。

<鳥居千万宮>

一人訓練に励む若子を家へと残し、一同は初代当主の計画通り、鳥居千万宮へと向かった。

入り口の大鳥居を先んじて潜ろうとする朝若の前に、先月大層な失言をかましてくれた男が、その姿を現す。

透けた体、斜に構えた態度。

黄川人だった。

「やあ」

軽い挨拶を投げてよこす相手に、知らず向ける視線が冷ややかなものになる。

それを知ってか知らずか、黄川人は構わず話し出した。

「見ての通り、僕には実体がないんだ」

両手を広げてみせる黄川人。

「だから君たちと一緒に戦いたくても戦えない」

別に共に戦ってほしいなんて、一度も思ったことのない朝若と竜香は、思わず顔を見合わせた。

「男のくせに役立たず野郎でホントごめん！」

そこで勢いよく両手を体の前で合わせた。

実体がないためか、パン、という本来聞こえるはずの音は、生まれなかった。

「でもあのさ・・・いつかきつと・・・、

いつかきつと体を取り戻して、君たちと戦える日が来ると・・・  
」

影香は、話す黄川人に決して近寄ろうとはしなかった。

天界からの使いのはずのこの少年に、何故か彼女は、良い印象を抱けなかった。

ただただ、その透けた身の影響からか、得体の知れないものを感じるばかりだった。

「来るといいんだけどね・・・あゝあ、やっぱり無理かな・・・

ンじゃ、また・・・」

あっさりと少年は去っていく。

「相変わらず、なんというか・・・」

「風のような方ですねえ・・・」

兄と姉が咳くのを、無言で傍で聞いていた。

その月の討伐で、「防人」「お焰」「火車」と、一同は3つの巻物を手にした。

< 一月の討伐を無事終えた行鳥家にて >

「母さんは僕に聞かせてくれた」

妹二人を当主の間、とされる部屋へと呼び、朝若は話し出した。

「自分の代では、いや恐らく僕たちの代でも、朱点を倒すことは難しいだろうと」

向かい合い座った三人はきつちりと正座をし、その内容が真剣なものであることが一目で知れた。

「僕も、残念だがその通りだと思っている。神々を見、鬼と実際に戦ってみるに、間違いないだろう」

それは苦く、辛い、認識だった。

「僕たちは、この呪いを、辛い戦いを、子供たちに、そしてその先の子供たちに、押し付けることになる」

竜香は、俯いて唇を噛み締めた。

否定することなど、できるはずもなかった。

それは彼女も、感じるどころだったからだ。

影香は一見無表情に、兄に視線を返すだけだった。

「だからせめて、母がよく言っていたように、良いものを残してやれるように、力の限り戦おう。」

できるだけのことをしてやろう」

兄の力の籠った言葉に

「そうですね」

涙をこらえ、何度も竜香は頷いた。

影香はただ一度、深く頷きを返した。

「何故かな、言っておかなきゃいけない気がしたんだ」  
真面目な話の終わりを意味するように、朝若は笑みを浮かべた。  
遠くから数を数える若子の声が、うっすらと届いてきた。

1019年5月

<青々と木々が活気付く頃>

朝若は、河原を歩いていた。

空は高く、一面に黄色の花が咲いた、地面が近かった。

川面を覗けば、陽光を反射しきらきらと輝く魚の背びれがそこらに見えた。

目を奪われ足の止まった朝若を呼ぶ声が、前方からあがる。

『朝若』

母の声に、勢いよく顔を上げた朝若は、一目散にそちらへと駆け出す。

そうして差し出された手を握った。

大きくて暖かな手。

なんだか嬉しくなって、朝若はぶんぶんとつないだ腕を振った。

『もう』

咎めるような内容とは逆に、見上げた母の顔も声も笑っていて、朝若も声を上げて笑った。

母の着た綺麗な若草色の着物が、中天から光を投げかけるお日様に輝くように映えていた。

その色は、朝若の好きな色だった。

『今日の晩御飯は何にしようか』

微笑む母が自分に尋ねる。

朝若は答えようと大きく口を開いた。

目覚めた時、目じりを伝う水の感触に、自分が泣いている事を知った。

母が美しく装った姿など、見たことはなかった。

二人で河原を、手をつないで歩く、そんなゆったりとした時間を、持ったことなどなかった。

だがしかし、懐かしかった。

母の傍には、いつでも、夢に見た春の河原のような、暖かさが、生命の輝きがあった。

「傍に来てくれてるんですね、母さん」

朝若はもう一筋だけ、涙を流した。

イツ花がいつまでも起きてこない朝若を、朝餉だと呼ぶ声が聞こえた。

しかし彼は、もう、起き上がることができなかった。

大粒の涙を零す若子の頭を、力のこもらぬ腕を持ち上げ、父は撫でた。

「元服までとはいかなくても、初陣には、一緒に行くつもりだったんだがな」

苦笑を浮かべ、すまん、と謝った。

「やだ、父様」

ふるふると頭を振る娘の頬にこぼれる涙を、どうしてやることもできず、朝若は浅く息を吐いた。

「どうか、二人とも、若子を頼む」

若子の後ろに座り、見守る妹たちに、掠れる声で、願った。

「お任せください、お兄様」

涙まじりの声で竜香が応じ、影香も頷いた。

「ありがとうございます」

ほっと息をつく父に、頑是無い子供のようにすがりついて、若子はなおも嫌だと繰り返した。

「当主は、影香に、」

「わかっています」

震える手の差し出す指輪を身を寄せて受け取り、影香は深く頷いた。右の手のひらで、そのまま強く握り締めた。

「父様、いや、いけないで・・・」

若子が、父の指輪を差し出した手をそのまま握りしめた。



「どうか、お前は、俺ほど早くないように・・・」  
祈るように呟いた朝若のもう片方の手が、娘の頬をそつと撫で、ぱたりと布団に落ちる。

父の顔を見つめたまま、娘の涙は止まることを知らなかった。

「ああ、参ったな、母さんほど良い言葉が、何も思いつかないよ」  
困ったような微笑を浮かべ、静かに、行鳥家二代目当主はその短かつた役目を終えた。

おい、誰か教えてくれ！

立派な最期ってのは

どうやりゃ イイんだよオ？

菜の花が静かに、五月の風に揺れていた。

<交神の間>

朝若の死からいくつか日を置き、予定通り交神を行うべく、竜香は交神の間へと赴いた。

兄の死を迎えたばかりで、気は進まなかったが、それも言うてはいられない。

行鳥家は、女ばかりだった三人になってしまった。

暗い表情のまま白い着物に身を包み座った竜香を見て、イツ花が困ったような声を上げる。

「えーっと・・・どの神様になさいますか？」

渡された神様のずらりと並ぶ冊子に、ちらりと目をやる。

正直、誰でも良い気分であった。

しかし、荒々しい、男の人には会う気分にはなれなくて。

最初に開いた頁で目にした神様に、視線がそのまま止まる。

「この方で、お願いします」

「わかりました」

ではお呼びしますねっ」

神を導く鈴の音。

よく聞こえる耳を持っているせいだろうか、その神はすぐにその場に現れ出でた。

そうして優しい顔と声で、竜香に呼びかけた。

宇佐ノ茶々丸「お相手します！」

竜香はほんの少し、癒された気がした。

1019年6月

くぼつぽつと軒下から雨のおちる頃、行鳥家仏間へ

雨のためか、足元から冷えの来る日だった。

仏壇の前に一人座した若子は、いつもより熱心に手を合わせていた。今日は彼女の初陣であった。

「お父様、おばーちゃん、若子をどうか見守ってください。

お姉様たちのお邪魔にならぬよう、立派に務めを果たせますように」  
両手を合わせ、深く頭を下げる。

「若子ちゃん、そろそろ行きますよ」

同じような祈りを何度も捧げる若子を待ちわびて、とうとう竜香が呼びにきた。

「はい」

がしやり、と鎧を鳴らして若子が立ち上がる。

二人して行鳥家の門へと向かえば、先に出た影香とイツ花が並んで待っていた。

「今日は白骨城で「速瀬」の巻物を探します」

静かな声音で影香が告げる。

竜香は頷いて、若子は

「はい」

と返事をした。

「よろしくお願いします」

叔母二人に向かって頭を下げる若子。

「こちらこそ」

竜香が微笑み頷いた。

影香は

「しばらくは後ろに」

と短く告げる。

「では、いってらっしゃいませ。」

当主さま、ご出陣！」  
威勢のいいイツ花の声に見送られ、三人は夏にのみ現れる、兵の墓場へと向かった。

<白骨城>

「影香姉さま、「速瀬」ってどんな呪文なんですか？」  
戦いの合間、若子が現当主へと尋ねた。

「「速瀬」は、速度をあげる呪文です。

それを使えば、すばやく移動することも可能になる。」（ 1  
刀についた血を無造作に振って落とし、叔母は答えた。

「より奥深くまで、探索することができるようになるわね」  
弓を下ろした竜香がおっとりとした。続けた。

「なるほど」

うんうん、と頷く若子。

「それにしても若子ちゃん、立派ね。」

初陣から立派に戦えてる」

戸惑うばかりだった自分と比べ、竜香は息をついた。

「え、そんな、お二人がいるから、安心して戦えるだけです」

しきりに恐縮して答える若子。

しかし自分たちよりずっと強かった、初代当主と朝若と一緒に、  
やはり自分はうるたえてばかりだった、と竜香は思う。

一方影香は、初陣から激しい戦いに身をおき、母は死の直前にあり、  
ただただ懸命であつた覚えしかなかった。

「って、若子ちゃん」

あることに気付き、竜香はくらりと目眩を覚えた。

「体力、もう私たちに追いついてるよ」

影香もこく、と頷き肯定した。

「あ、本当だ」

少し嬉しそうな顔をする若子。

「いくら始めは体力があがりやすいと言っても、すごいね！。  
さすがお兄様の子」( 2

竜香に感心した声を出されて、若子はしきりに照れてみせた。  
それにくすりと笑う影香。

「さあ今月はもうお終い。

この階で「速瀬」が出ることもわかったし、来月必ず手にいれまし  
よう」

こくりと頷く姉と姪。

三人は大した傷を負うこともなく、無事京の町へと帰還した。

1019年6月(後書き)

<おまけ>

1

「速瀬」は奥深くまで進むためにはかかせない呪文です。  
速めに手に入れておくことをお勧めします。

速風の御守りというアイテムで、同じ効果を得ることができます。

2

出撃隊に入ってから6ヶ月は体の能力が伸びやすいです。

8ヶ月以降からは技の能力が伸びやすいそうです。

1019年7月

< 蝉の声の聞こえ出す頃、行鳥家 >

「ちゃんと着て頂戴！」

「そんな必要はないでしょう、見せる人もいないのに・・・」

「私が見たいの！」

居間から聞こえる珍しく争うような声音に、若子は驚き障子を開けた。

「ど、どうしたんですか、姉様たち」

おろおろと尋ねる。

「影香が、元服なのに、正装をしてくれないの」

振り返り言った竜香は、ちよつと泣きそうな顔をしていた。

「え、影香姉様って今月で元服ですか！？」

落ち着いていらっしやるからてつきりもうとつくだと

驚き叫ぶ若子。

さりげに失礼だ。

「・・・」

「若子ちゃん、それはちよつと」

無言の影香にかわり、竜香が微笑し、軽くたしなめる。

「ご、ごめんなさい！」

あわあわと謝る。

「いえ、それはいいんですけど」

実際影香はあまり気にしてはいなかった。

世の女性とはほんの少し感覚がずれている。

良くないのは、たった今竜香に迫られているおめかしの方だ、など  
と思っているのだから。

しかし。

「さ、若子ちゃんも来たことだし、ちゃんと正装してお祝いしない  
とね？」

にっこり笑って影香に向き直る竜香。

これはとても逃れることは無理そうだ、と諦めた影香は、正装し元服の儀式をきつちりで行う事になった。

影香の元服の儀式も終え、一族が落ち着いた頃。

一家がのんびりと居間で団欒していると、天上へ竜香の子供を連れにいったイツ花が戻ってきた。

「ただいま戻りましたー！」

「おかえりー」

玄関へ向かい、声をあげる。

「お喜びください、女のお子様です！」

少し気性の激しいところが見られますがどちら似なんでしょう？「がらりと障子をあけ入ってくるなりのイツ花の言葉。

それを押しのけるようにして居間に入ってきた幼子が大きな声を出す。

「はじめまして！」

えーと……？」

「始めまして、私があなたの母親の竜香よ」

立ち上がった竜香が幼子に近寄り、その身をぎゅっと抱き寄せる。

「おかーさん！」

嬉しそうに幼子は背を伸ばして母にしがみついた。

「当主で叔母の影香です」

「従姉妹の若子です！」

家族の自己紹介を聞いて、少女は母の身から体を起こし、二人に顔を向けた。

そして母の身に腕は回したまま、

「よろしくおねがいます！」

とぺこっと頭を下げた。

「こちらこそ」

微笑する影香、



「よろしくね！」

にこにこ嬉しげな若子。

一族は女ばかりながら、賑わいを取り戻しつつあった。

「あなたの名前は茶香にしましょう」

優しく微笑む竜香。

しかし癒し系の両親の元に、一体どちらに似て、こんなに威勢の良  
い子が生まれたのかは、全くの謎であった。

大人しく自習をしているように茶香に言いつけ、白骨城に向かった  
一族は、当主影香の宣言通り、「速瀬」の巻物を手に入れた。  
そうしてさらに成長した若子の体力は、叔母たちよりおよそ100  
も多く、350を越えたのだった。

1019年8月

くじりじりと日の照りつける京の町にて>

「うわあ、すごい!!」

目の前に広がる光景に、若子が感嘆の声を上げる。

行鳥家一同、そしてイツ花は、本日開かれる「朱点童子討伐選考試合」に参加するため、京の町へと来ていた。

さびれ荒れ果てた京の町のどこからこんな人が、というほどの人ごみ。

そして様々な露天。

早速どこかの店へ走っていった茶香の後を、慌てて竜香が追っていた。

そこへ行鳥家なけなしの私財を投じ、京復興の助力へと行っていた当主、影香が後からやってくる。( 1

待ち合わせ場所で呆然と立ち尽くし、大きく口を開いている姪に、微苦笑を浮かべ声をかけた。

「若子」

「あ、影香姉様」

さすがに口を閉じ、振り返る若子。

「竜香たちは？」

尋ねる当主に

「どこかへ走っていった茶香ちゃんを追っていかれました」

と答える。

「イツ花さんは、当主様のかわりに! って張り切って選考試合申し込みに行かれましたよ」

「そう。・・・しばらくここで待ちますか」

ふう、と息をつき、若子の隣に落ち着く。

「若子は、どこか見えてきてもいいのよ？」

ふと気付いたように視線を向けた当主に、若子は照れたように笑っ

た。

「見てるだけで十分です。

試合前にうるちよろしてて、怪我しちゃったら大変だし」

若子にはこの人ごみの中、何かにつまづき転ぶ自分が簡単に想像できた。

しかし実際には、大人しげな見かけに反して、人より頑丈な彼女の場合、少し転んだくらいで怪我などする心配はあまりなかったのだが……。

露天を、通りを、行き交う人々を眺め、祭りの雰囲気彼女たちなりに楽しんだ頃、申し込みを済ませたイツ花が意気揚々と、りんご飴をほうばる茶香をようやく捕獲した竜香が、疲労困憊して戻ってきた。

<夏の朱点童子討伐選考試合にて>

試合は2ブロックに別れ、勝ち残り形式で行われるらしい。

茶香をイツ花に預け、影香、竜香、若子の三人は、選手控え室へと入った。

「うー緊張します」

ぎゅっと目をつむり、愛用の薙刀を抱きしめる若子。

「うちが参加するのははじめてですものね」

竜香も不安げに、頬に手をあてた。

誰か経験者がいるならともかく、行鳥家はこれが初出場だった。何をすることも勝手がわからない。

だが、

「そう心配しなくても大丈夫。きっと勝てるわ」

影香が穏やかにそう微笑めば、竜香も若子も、本当に何も心配することは無いような気がして、少し落ち着くのだった。

「それより茶香がイツ花を困らせていないかの方が私は心配よ」

影香の穏やかな微笑みは微苦笑へと変わる。

確かに母親も元気で家事に訓練にとよく動くが、茶香はそれ以上だった。今も何か興味のあるものを見つけて走り回っていないとは全く言い切れない。追いかけるイツ花は相当大変だろう。

思い至った若子もあたふたと少女を追いかけるイツ花を想像してか、「そうですねえ」

と笑顔になる。

竜香は顔を赤くして、

「もう影香。でも本当にイツ花を振り回してそうだからとため息をついた。

そこへ、行鳥家第一試合を知らせる声がかかる。

一同は顔をひきしめて、試合場へと向かった。

第一試合の相手は、「本願院選抜」。

大きな槌を構えた屈強な男たち三人が、行鳥家の前へと立ちほだかっただ。

礼をして構える、赤と黒の揃いの衣を纏った女三人。

まずは大将同士小手調べと、先んじて影香の剣が、相手の大将へと迫った。

大柄なその男は、その分動きの方は鈍いのか、あっさりと影香の剣を受ける。

確かな手ごたえ。

「姉さん、2番目を狙って！」

弓をきりりとひいた姉に、影香が大声で指示を出す。

その声に、深手を負った大将のすぐ隣へ並ぶ相手へと、竜香は即座に弓を射た。

あっさりと倒れ伏す、相手。

「若子！」

「はい！」

当主の意を汲んだ若子が、前衛に躍り出ると、その手にした薙刀で大きく薙いだ。

それであつという間に決着はついた。

「一本、それまで！」（ 1  
判定の聲が飛ぶ。

こうしてあつという間に一試合目を勝ち抜いた行鳥家は、続く第二、第三試合も併せ技で一本を勝ち取り、第三試合も有効勝ちではあつたものの、勝利を収めたのだった。

こうして鮮烈な初陣を飾った行鳥家、屋敷の前には、試合を見ていたという一般市民がしばし集って、イツ花を往生させたという。

1019年8月(後書き)

<おまけ>

1

相手を全員倒せば一本勝ちとなり、報奨金をもらえます。

有効勝ちが相手の大将を倒した場合で、他時間ぎれの判定勝ちもありません。

できれば報奨金のため一本を狙いましょう！

ちなみに優勝すれば多大な支度金と、褒美の品をいただけます。

1019年9月

<残暑がまだまだ厳しい頃、行鳥家>

「先月選抜試合に優勝したため、行鳥家の評判はうなぎのぼり！まさに飛ぶ鳥落とす勢いです！」

イツ花が上機嫌でまくしたてるのを、茶卓を囲んだ竜香、影香、若子の三人は、湯呑みをその手に気のない相槌を打った。飛ぶ鳥落とす勢いはいいのだが・・・「鳥」の字が入ったこの家では、少し不吉ではないのだろうか？

竜香は苦笑を浮かべた。

影香はなんの感慨もなく、茶をすすっている。

若子はなんとなく、居心地の悪そうな顔をしていた。

2ヶ月で文字通りすくすくと成長した茶香は、弓を片手にどこかへ出かけ、この場にはいなかった。

「働き者で優しい竜香さんに癒されたい！」

唐突なイツ花の言葉に、え？と湯呑みから顔をあげる竜香。

「みすてりあす、な影香さんの微笑に惑わされたい！」

さすがに普段あまり表情を動かさない影香も、眉を軽く寄せる。

「健気で頑張りやの若子ちゃんを包んであげたい！」

若子は両手に湯呑みを抱えたまま、口をぽかん、と開く。

「まさに三人の人気は甲乙つけがたく、3分しちゃってる感じですよ！」

イツ花はあくまでうきうきと楽しげだ。

竜香は苦笑し、影香は軽く息を吐き、若子は頬を染めて俯いた。・・・現在行鳥家には、ツッコミができる人間が不在であった。

<交神の間>

「さあ、当主様！どなたになさいますか！」

先ほどまでの勢いの衰えぬまま、イツ花は意気込んで影香へ尋ねた。神様一覧の冊子を渡された影香は、落ち着いた表情でそれを繰って中身を確認する。

「・・・この方で」

影香が示したのは、「熊祖権現」。

土の神であった。

「・・・よろしいんですか？」

イツ花が確認をとる。

影香の父もまた、土の神だったからだ。

しかし、小さく微笑を浮かべた影香は、軽く頷いた。

「懐の深そうなお方だから」

なんとなく、影香は力を重要視して選びそうだと思っていたイツ花は、わずかに驚いて目をしばたいた。

影香様の落ち着きっぷちは、確かに土の神様との相性が良いんだろ  
うなあ、と納得したイツ花は、一つ頷いて当主より距離をとった。

「それではお呼びいたしまーす」

響く鈴の音、舞う薄衣。

やがてゆくりと現れた男に、影香は微笑みを向けた。

「できれば冬に、お会いしたかったですね」

雪舞う厳しい冬に、この男ならきつと暖かく包んでくれるだろう。

「よし！俺が全部面倒みてやる！」

イツ花はこのまま影香が攫われてしまうのではないかと、残暑厳しいこの季節、身を凍らせて儀式の終わりを待ったという。



<庭に落ち葉舞い降りる頃、行鳥家>

赤く染まつた山々を眺めていた影香は、ふと、違和感を感じた。しかしそれが何なのか、その時の彼女には、わからなかった。

「イツ花、私にはおーーきなッおにぎりをお願いね。腹が減っては戦はできないからねッ」

出陣する行鳥家面々のため、台所で握り飯を握るイツ花に向かい、茶香が大声をあげる。

イツ花はそれに、

「はいはい」

と微笑み、頷いた。

茶香はこの家に来た時から、いつも三度のご飯を誰よりもおいしそうに食べてくれる。

握り終わったおにぎりを脇の大皿に置こうとしたイツ花は、茶香のそれより大きな声をあげた。

「あー！おにぎりがない！！」

頬にご飯粒をつけた茶香が即座に応じた。

「わ、若子姉えがつ！」

「え、私！？」

台所の前をたまたま通りがかった若子が、すつとんきょうな声をあげる。

「って、茶香さま、ほっぺにご飯粒つけてるじゃないですか！？」

「こ、これは若子姉えにすすめられて！」

「な、なんの話なのー！？」

にわか騒がしくなった台所の様子を見に来た竜香が、なんとなく状況を理解し、茶香の頭をこづいた。

「もう、ふざけてないで、準備なさい」

頭を抑えた茶香がえへへと笑う。  
今日は彼女の初陣だった。

< 九重楼・門前 >

九重楼六階にあるという「お地母」の巻物を狙う行鳥家一行は、塔へと続く坂道を駆け抜け、早々に九重楼門前へと辿り着いた。ここは達磨に良く似た鬼、七転斎八起が守っている。( 1 門へと続く階段へ足を踏み出すその前に、当主・影香は一同を振り返った。

「みんな準備はいい？」

神妙に頷く面々。

「茶香は初陣なのだから、くれぐれも無理はしないように」

七転斎八起に挑むため、ある程度道中他の鬼を討伐し、彼女に経験を積ませたが、それは気持ち程度のものだ。

まだまだ、正面から戦って行くには頼りない。

「わかってます」

わずかにむくれた茶香に頷きを返し、影香は竜香と若子を見た。

「では手はず通りに」

姉と姪は了解の意を返す。

一同は、塔の門へと一步を踏み出した。

そうしてその場に炎を巻いて現れる、赤い肌の鬼。

ほーほっほ！

竜香の記憶と寸々たがわぬ笑い声をあげ、鬼は一同へと襲い掛かった。

鬼の攻撃が、若子へと命中する。

わずかに怪我を負ったものの、彼女はよろめきもなかった。

「武人！」

竜香が叫び攻撃力増加の術を影香にかける。

「武人！」

さらに若子が続いた。

「お覚悟！」

鋭く踏み込んだ影香の剣が、七転斎八起の体を一刀の元に切り伏せる。

勝敗はあつという間についた。

とても強かった母でも2手かかった。

武具が一新されたとはいえ、この快拳に、竜香は

「私を越えなさい」

という母の最期の言葉を思い出していた。

<九重楼・六階>

この月、熱狂の火に併せ、一同は六階まで急いだ。しかし。

「でませんでしたねえ・・・」

赤い火は、消えてしまった。

「まあ普通に鬼を討伐し、出ることを祈りましょう」

若子の呟きに、竜香が弓を構えて答える。

「そうそう、どんどん行こう！」

頭防具についた飾りを揺らして、茶香が続けた。

なんだかぼんやりしていた影香は、視線を送られ、わずかに動揺した様子を見せ

「え、ええ」

と頷いた。

首を傾げる、竜香と若子。

何もかも見通したように、いつも沈着冷静な影香には、珍しいことだった。

「と、来ます！」

迫り来る赤こべ大將に気付き、若子が短く警戒の声を発した。即座に戦いの体制に戻る一同。

鬼たちと対峙し、ひきしまった顔つきに皆がなる中、影香が唐突に叫んだ。

「茶香、逃げなさい！」

鬼へと向かい弓を構えたまま少女は

「え」

と戸惑った声をあげた。

しかし警告は間に合わなかった。

赤こべ大将と共に行鳥家へと向かってきた、数多くの山ワラたち。

赤い肌をし不自然に腹のつきだしたその鬼は、次々とその攻撃目標

を茶香と定め、襲い掛かった。( 2

「っ!?!」

茶香はあまりの猛攻に、耐え切れず膝をついた。

「茶香！」

この戦いではじめて、多くの血を流す我が子に、母が顔を青くして

「常盤の秘薬」を使った。

影香も回復を、と術の用意に入る。

若子が一撃で山ワラたちをしとめようと、薙刀を構えた。

それでも、間に合わなかった。

何匹の山ワラが、今月出陣できるようになったばかりの少女を、狙

ったのだろうか。

「ご、めん、お母さん・・・」

とうとう、細い体は力尽き、その場に崩落れた。

「茶香ぁーーーーーッ!」

母の叫びが、狭い塔の中、反響して響いた。

1019年10月 前編（後書き）

<おまけ>

1

前にも書いた気がしますが、念のため。

1年たつと、前年倒した中ボス、ボスは復活します。

2

このゲーム、敵もけっこう頭が良いです。

大将狙いや弱いもの狙いを平気でやってくれます（涙）

<九重楼・六階>

影香は当主の指輪を掲げた。

指輪に宿る行鳥家の先祖、彼女の祖父の霊が現れ、鬼たちを一網打尽に切り裂く。

茶香へと駆け寄る竜香。

「茶香！茶香あッ！」

倒れ伏す娘を抱き起こし、大声で名を呼んだ。

今しも黄泉へと向かおうとしているやもしれない、娘を呼び戻そうとでもするかのように。

鬼が全て倒されたのを確認してから、若子も影香も、茶香の元へと向かった。

若子はすぐ傍に片膝をつき、影香は背後に立ち尽くしたままで、力を失った茶香と、その娘を抱きすくめ滂沱の涙を流す竜香を見守った。

母が思わず、目覚めて欲しいと娘を揺さぶった時。

「う……」

茶香の唇から、小さなつめき声があがった。

「茶香!?!」

血に汚れた顔を覗き込む。

「かぁ、さ……いたい」

茶香は小さく眉根を寄せて、我が身を拘束する母親を見上げた。

「茶香あー!!」

感極まって再び強く抱き寄せる母。

茶香は

「いたいたいいたい!!」  
と叫んだ。

微苦笑した影香が、すかさず回復の術、「泉源氏」を唱える。

若子は流れる涙をようやくその手で拭った。

「ごめんね、母さん、泣かないで」

回復してもらい若干落ち着いた茶香が、母の頬を拭った。

「私は、母さんをおいて逝ったりしないから。」

若子ねえも、泣かないで」

一同は、死の淵に立ち、大きく健康度を損なった茶香のため、それからすぐに京の都へと帰還した。

<行鳥家仏壇前>

影香は一人仏壇の前に座し、手を合わせていた。

茶香を救ってくださった感謝を、祖父祖母、母兄に捧げていた。

そうして、自分の考えに沈んでいた。

影香には、茶香が死にそうな怪我を負うことが、寸前まで「見えなかった」。

それどころか、霞がかかったように、何もかも朧で、未来見という未来見が、全くといっていい程でできなかった。

以前同じこの「目」について仏前で母へと相談したとき、あの時は、見えすぎることが怖かった。

しかし今は。

見えていれば茶香があればほどの怪我を負うことはなかったのではな  
いか、と、心が凍えそうになる。

「母様……」

影香の唇から漏れた声は細く、頼りなく揺れる蠟燭の炎のように、  
風に儂く消え去りそうだった。

(私は、恐ろしい……)

影香の伏せられた目蓋の下、熊祖権現の面影が、浮かんだ。

1019年11月 前編(前書き)

ゲーム「俺の屍を越えてゆけ」のプレイ記録を小説風に書いたものです。



1019年11月 前編

<北風が忍び始めた頃、行鳥家>  
行鳥家の冬支度は早い。

初代当主が大変な寒がりで、早々と始めていたせいで、その娘たちもそんなものだと思い込んでいた。

きつとこれから先もずっと、この家の冬支度は早いのだろう。  
炬燵を用意している一同の元へ、ぱたぱたと足跡をたて、イツ花がやってきた。

「当主さまー！お子様をお連れしましたよー」  
位置を支持していた竜香と、若子と共に卓を持っていた影香がそれをおいて振り返る。

「お喜びください、女のお子様です！  
耳の穴がお父様によく似てらっしゃいます」  
その言葉を聞いた影香はほのかに微笑んだ。

障子を開けたイツ花の後ろから、幼子が、そっと居間へ入ってきた。  
少女はまだ小さいというのに、大人びた目をして、静かにその場に立っていた。

「こちらへいらっしゃい」  
「はい、お母様」  
静々と幼子は母へと歩み寄った。

「権現様は立派な教育をしてくださったのね」  
影香は優しく微笑み、腰を落としてわが子の頭を撫でた。

「あなたの名は現香うつくかとしましょう。」  
現うつくをしかと見極める子となるように」  
「ありがとうございます。」

現香は立派に働いてみせます」  
現香は母を継ぎ、剣士となることとなった。

「私も行きます！」  
体中に痛々しく包帯を巻いたままの少女が、声色は勇ましくそう叫んだ。

表情には張りがあり、瞳には覇気があった。

しかしその体がとて戦いに行けるものではないことは、誰の目にも明らかだった。

「駄目です。許しません」

泣きそうな顔をした竜香が、そうわが子に告げた。

「家になんていらぬ！母様だけ、行かせない！」

強い目をしたわが子に、竜香は息をのみ、もう何も言えなかった。

先月彼岸へと近づいたわが子は、母の身こそを案じて行くと強情を張るのだと悟った。

そこへ黙ってやりとりを見ていた影香が、一歩近づいた。

「茶香」

静かに名を呼ばれ、茶香はそちらを向いた。

頭に巻かれた包帯の端がわずかに揺れた。

「現香に稽古をつけて欲しい。」

誰も大きな怪我をさせないことは、私が約束します」

透き通った瞳に見つめられ、茶香はあれほど燃えていた胸のうちが静まり、何も反せなくなっていることを知った。

この叔母が不思議な人物であることは、茶香も知らず悟っていた。

「・・・わかりました」

茶香は唇をとがらせた。

「その代わり、がんがんしごいてあげるから」

フフ、と不気味に笑む従姉妹を見て、現香はびくつとイツ花の陰に隠れた。

1019年11月 前編（後書き）

<おまけ>

健康度が下がると、体力、攻撃力とも低下します。  
無理はやめて養生させてあげましょう。

1019年11月 後編(前書き)

ゲーム「俺の屍を越えてゆけ」のプレイ記録です。

<雪吹雪く大江山登山口>

若子の元服の儀を済ませると、竜香、影香、若子の3人は、大江山へと向かった。

しかしもちろん、先代当主、朝若の言通り、まだこの山を制し、朱点童子に挑むつもりはなかった。しかし。

「ボクも君たちと同じようにあの鬼の呪いを受けているんだ」  
いつものように唐突に現れた黄川人が、唐突に喋りだす。

「たぶん・・・たぶんだけど！」

あいつを倒せばボクの体がこの世に戻る！」

透けたその腕を前へとかざし、黄川人は叫んだ。

わずかに同情と親近感をその瞳に宿す、竜香と若子。

影香だけがただ一人冷静な眼で黄川人を見つめていた。

「そうすれば君たちと戦え・・・」

あれれれ・・・!?

あの鬼を倒せば、もうこの戦もおしまいだっけ？」

急におどけたような声を出す身の透けた少年。

「うーん、そりゃ残念。」

ボク、こう見えて意外と強いんだよ。

アハハ・・・いやホント、ホントだってば！ アハハハ・・・」

苦笑を浮かべる竜香と若子に、ひとしきり笑って見せた後で、少年は真面目な表情に戻って続けた。

「今の君たちならきつと勝てる。」

それだけの苦勞をしてきたこと、ボクは知ってる、信じてるからね  
！」

少年は本当に、自分たちに朱点がもう倒せると信じているんだろうか。

頼りないその身で精一杯手を振り見送る姿を見て、若子は胸が痛んだ。

まだ、自分たちはそこまで達していない。

手にした薙刀をきゅっと握り締め、唇を軽く噛み締めた。

せめて、行鳥家が少しでも早く朱点を倒せるように。

少しでもこの山を調べ、後に記録を残してやるうと誓った。

< 大江山 >

今月の目標は、「お雫」の巻物を持ち帰ることだった。

その巻物を持つ大将はここ大江山に2体いる。

しかし、一方の「紅こべ大将」は体力が高く、多くの取り巻きを引きつれ、もう一方の「悪羅大将」は攻撃力も体力も高く、一同は苦戦を強いられていた。

必死で術を併せ戦っても、なかなか狙う「お雫」は得られない。

( やつと・・・っ！ )

そう思った直後に、とどめをさしきれず、大将に持ち逃げされたりしていた。

もう、一同の術力も底をつき、回復薬も携帯袋から消えた。

「もう、帰りましょう、姉さま」

若子が薙刀の先を雪に埋め、柄に顎を置いてそう進言した。

既に薙刀でその身を支え、肩で息をしていた。

度重なる鬼の猛攻に、傷は癒してはいても、激しく疲労していた。

「そうね、確かにこれではもう、鬼は倒せない」

弓を持たない方の手で額にかかる髪を払って、竜香も同意した。

大江山の鬼は強く、術を使って戦うか、打撃力で戦っても回復を多く必要とした。

今はどちらももう望めない。

だが。

「いえ、もう一匹だけ行きます」

静かに、影香は宣言した。

信じられない、という顔をする二人に、彼女は穏やかに笑んだ。

「私に考えがあります」

はたして。

まもなくやってきた鬼に、彼女はその手を大きく振りかざした。

「祖霊よ、我に力を！」

当主の指輪に宿る彼女の祖父は、直ちにその場に現れると、全ての鬼を薙いだ。

一撃の元に倒れ伏す鬼たち。

その大將は、「お雫」の巻物を有していた。

先見の能力が衰えてなお、その知略と大胆な行動力で、彼女は運を引き寄せていた。

1019年12月(前書き)

ゲーム「俺の屍を越えてゆけ」のプレイ記録を元に物語風に書き  
つづった物です。



1019年12月

<京の都>

「こんにちは」

京の都復興のため、若子、影香、そしてその娘の現香は、京の商いの盛んな大通りに面した、一軒の武器屋へと来ていた。

「お、いらっしやい！」

一代目当主朝香の頃より京復興に尽くしてきた行鳥家のおぼえは非常によかった。

店の親父は愛想よく一同を迎え入れた。

「実はね、新しい武器を仕入れたんだよ、どうだい？」

早速笑顔で自慢かね、勧めてくる。

「行鳥さん家にはお世話になってるからね、安くしとくよ」

「へえ」

早速武器を見出す若子。

とある事に気づき、親父を見上げた。

「あれ？前あつた武器は？」

「前のはもうないよ。それより良いの仕入れたからね」

にこにここと応じる親父に、たちまち若子の顔色が変わる。

影香が苦笑を浮かべた。

現香はわけがわからず、母の顔を見上げた。

「あいてむ全制覇できないじゃん！！！」

この時の若子の叫びは、表の大通りの通る人まで、立ちすくませたという。

<火鉢の炭はぜる行鳥家居間>

「た、大変なことに気がつきました！」

京復興のため、出かけていた若子が、戻ってくるなり叫んだ。

「おかえりーどうしたの？」

茶香の傷の具合を見ていた竜香がのんびりと応じた。

若子に続いてもどってきた影香と現香が

「ただいま」

と声を揃えた。

「武器屋さんに行ってきたんですが・・・」

がっくりと肩を落とす若子。

「新入荷して、以前の武器がなくなってたのよ」

苦笑して後を続ける影香。

「え、じゃあ・・・」

思わず薬や包帯を片付けていた竜香の手が止まる。

「行鳥家目標の1つ、達成できないじゃん！」

茶香が立ち上がって叫んだ。

先月彼女にしごかれた現香がびくりとして、母の後ろに隠れる。

「仕方がないわね」

微苦笑する影香。

行鳥家にわずかに沈黙が落ちた。

とそれを破って茶香が話し出す。

「まあ、でも、大量の武器とか、出陣準備の時邪魔だし！

倉庫の肥やしに集めることないじゃん」

茶香の尤もな意見に、思わず一同は頷いた。

「お金の無駄でしょ」

母の顔を同意を求め見る。

「まあ・・・そうね」

再度頷く一同。

気を取り直し、今月も大江山へと向かうのだった。

1020年1月(前書き)

ゲーム「俺の屍を越えてゆけ」のプレイ記録を元に物語風に書きつづった物です。

1020年1月

<庭の隅に雪残る行鳥家>

すぱん！と子気味よい音を立てて、竜香の放った弓が、庭の木に作られた的の中央を射た。

「おーさすが母さん」

今日も水色の髪を両脇でお団子に結った茶香が、自らも弓を小脇に抱え、感嘆の声を上げた。

「来月はあなたも3度目の出陣。」

もう戦力として数えられる頃です。

いざという時はさぬように、あなたも射てみなさい」

言われて神妙に頷いた茶香は、きりりと弓を構える。

たん！

まもなく放たれた矢は中央をわずかに逸れ、母の立てた矢の右下へと突き刺さった。

「狙いが甘い。短すぎる。」

あなたは度胸はあるのはいいけれど、こらえ性がなさすぎます」

いつもは優しいばかりの母の、きつい言葉。

唇を引き結んだ茶香は

「はい」

と応え、もう一度弓を構えた。

「後ろを守る私たちの狙いは、確実にないといけません。」

数多くの敵が現れ、全てを倒すのが難しい時、大将の首を取るの私たちの役目」

母の教えを受け、茶香の弓が、きりきりと緊張を孕んだ音を立てる。例えば茶香が倒れたあの戦い、一撃で大将を仕留める力量が自分にあつたなら、と竜香が思わぬ日はなかった。

しかし、最早彼女に残されたときは、わずかだった。

せめてわが子にそんな思いはさせないように、初めて竜香は、厳し

い言葉を使った。

そうして放たれた矢はまっすぐに飛び立ち、的へと突き立った。

そこは竜香の隣、ごくわずか上の位置。

中央と言って遜色ない場所だった。

「そう、そうよ、茶香。

すごいわ」

嬉しそうな母の声に、茶香も振り返り笑みを向けた。

しかし、予想に反して、母の顔に浮かぶのは笑みではなく、涙だった。

「ど、どうしたの、母さん、なんで泣いてんの!？」

慌てる娘に、母は微笑みを浮かべた。

「嬉しいのよ、あなたが私を越えていつてくれる。

それがとても嬉しいの」

<行鳥家道場>

木刀を片手に軽く持った母親に、何度打ちかかっても軽く跳ね飛ばされた。

それでも、現香は、挑むことをやめようとはしなかった。

今は母に稽古をつけてもらい、牙を養う時だと、彼女は深く理解していた。

彼女の父、熊祖権現は厳格な男だった。

一人で生きられねば、誰かの役に立つ生でなければ意味はない、ときつく教えられた。

何もできないものになれば、誰かの糧としてその生を閉じるまでだと。

だから彼女は今、この行鳥家では、鬼を討伐する役に立てるようにならねばならない、と思っていた。

そのためには、一日でも早く剣の使い道を知り、腕をあげねばならない。

目を輝かせて懸命に挑みかかる娘の姿に、影香は微笑を浮かべた。この子は確かに誰より現実を見、誰より生きている、と。そうして浮世離れし、どこか別の世界に生きているような自分に、このような子を授かったことを、深く神に、権現に感謝した。

<行鳥家交神の間>

「き、緊張します」

白い着物に着替えた若子が、がちがちに固まってそう言った。きつちりとした正座。

心持ちいつもより小さく見えるほどだった。

「そんなに固くならなくてもー神様に全部お任せすれば大丈夫ですって！」

軽く笑い飛ばしたイツ花に、応える余裕もなく、若子のはあ、と頷いた。

(朝若様みたいだなあ)

とイツ花はふと、彼女の父親を思い出した。

感傷的になりそうな自分を振り切り、ことさら明るく

「じゃ、どなたになさいますかー？」

と尋ねる。

「え、えつとお・・・」

きよどきよどと落ち着きなく視線が、神様の一覽の上をさ迷う。

ふとその視線が、一点にとまり、またさ迷い、そしてやはりそこに戻り・・・

「若子様？」

「あ、あのお・・・」

情けない顔をして正座したままイツ花を見上げる若子。

その視線が黒鉄右京のあたりを、いつたりきたりしていた。

「黒鉄右京様ですかあ？」

はつと顔を上げた若子が、泣きそうな顔で

「いいですか？」

と尋ねた。

「ではお呼びしますね」

少しでも心惹かれる殿方を見つけてくれたのなら、イツ花にとってもそれは嬉しいことだった。

いつにもまして弾むような足取りでの神卸しの舞。

やがてどかん！と派手な音を立てて現れた男を、やはり若子は正座をして小さくなつたまま迎えた。

黒鉄 右京「承知！！」

「よ、よろしくお願いします！」

上ずつた声で若子は叫んだ。

1020年2月 前編(前書き)

ゲーム「俺の屍を越えてゆけ」のプレイ記録を元に物語風に書き  
つづった物です。



1020年2月 前編

<行鳥家居間>

「大変です!!」

術の巻物を広げつつ、炬燵でくつろぐ一同の元に、イツ花が駆け込んできた。

巻物に視線をやっていた影香もその娘現香も、ぼんやりとした顔をしていた茶香もその慌てた声に視線をあげた。

イツ花の後から入ってきた竜香が微笑みながら続けた。

「いろんなお店が大売出しなんですって」

のんびりとした母の声に、茶香が勢いよく立ち上がった。

その衝撃に揺れてこぼれそうになった湯のみを、冷静にすばやく影香が掴んだ。

「ごうしちやいられないじゃん!!」

そう言い残すと、すごい勢いで居間を飛び出していった。

若子姉えー！出かけるよー！

という大きな声が、ばたばたと慌しい足音と共に聞こえてくる。

竜香と影香は顔を見合わせて微笑を浮かべた。

そうして出かけるための準備をはじめのだった。

<わずかに賑わう京の都>

行鳥家が復興のため私財を投げ打ってはいるものの、まだまだ京は荒れている。

それでも大通りに面した商店の多くが大安売りを行うというこの日、都は賑わいを見せていた。

威勢のいい茶香が率先して若子と共に、現香をひっぱり店へ飛び込んでいく。

竜香と若子はのんびりその後が続いていた。

「おー！この薙刀いいんじゃない？若子姉え、持ってみなよ！」

「そ、そうかな？」

買い物を楽しむ（とは言っても一般の女性が楽しむそれとは内容が大きく違っていたが・・・）娘たちを眺めつつ、竜香と影香もゆったりと会話しつつも、ぬかりなく視線をめぐらす。

「影香、今月の出陣、私はお休みさせてもらうわね」

大弓を手に、竜香は妹に向かってゆると微笑んだ。

ごく近くで剣を眺めていた影香は、その視線を姉へと向ける。

「・・・ええ」

頷いた妹に、竜香は笑んだ。

現香も実戦へと入るこの月、誰かが家に残る必要があった。

そうしてそれは、一番年をとった自分こそがふさわしいと、竜香は思う。

これ以上経験を重ねたところで、最早自分に成長は期待できないだろう。（ 1

何も聞かず、頷く妹に、竜香は感謝した。

1020年2月 前編（後書き）

<おまけ>

1

若いうちはお留守番にすると忠誠心が下がりますが、お年を召せば大丈夫です。

その人が特に強く、その人が生きているうちに多くの敵を倒したい、などの理由がなければ、なるだけお年を召した方には引退してもらい、次世代を育てていきましょう。

1020年2月 後編(前書き)

ゲーム「俺の屍を越えてゆけ」のプレイ記録を元に物語風に書き  
つづった物です。

<行鳥家>

出陣のため戦支度を整える行鳥家の女たち。

その中であつて竜香だけは、イツ花と共に、台所でおにぎりを握っていた。

茶香の好きな、大きなおかかの握り飯。

たった一人の娘のため、何かをしてあげられるのは、彼女にとってこの上ない喜びだった。

最後のそれを握り終え、笹の葉の上においた時、ちょうど茶香が台所へとやってきた。

背に矢筒を背負い、片手に弓を持った完璧な戦支度だった。

「母さん、用意できたよ」

弓を持たない方の手で、暖簾をあげて、そう声をかけた。

「ええ」

握り飯を包み、竜香は眩しそうに目を細めて娘を見た。

「茶香」

声をかけ、娘に近づく。

そうして両手のふさがった娘の頬に、両手を添えた。

「立派になつたわね」

見る間に茶香の頬が赤くなり、母の手に温もりを伝える。

「や、やめてよ、母さん！ 恥ずかしい！」

先に行つてるからねっ」

慌てた茶香は暖簾を持つ手を放し、大きな足音を立て、玄関へと向かっていった。

弁当の包みを持ち、ふふ、と笑つた竜香も、イツ花と共に玄関へと向かう。

行鳥家の門前で弁当を受け取つた討伐隊一同は、表情を引き締めるのと、見送る竜香とイツ花に、いつてきます、と口々に告げた。

「待つていてくださいね」

真剣な表情で、告げる影香に、竜香は微笑んで頷いた。

「ええ、吉報を待つています」

りんとした後姿を見せ、九重楼を目指す影香。

ひとつ深く頭を下げ、母に続く現香。

若子は大きく手を振ってから、当主に続いた。

そうして茶香は、初めて目にする手を振り見送る母が、何故だか小さく見えて、何度も何度も振り返り見るのだった。

その月一同は、「暴れ石」の巻物を取得した、という吉報を竜香へと持ち帰る。

しかし、聞かせるべき相手は……。

「竜香さまが、お倒れになられました……！」

いつもは門前にて一同を出迎えるイツ花は、今日は玄関の戸が開かれてから、慌てたように駆けつけてきた。

そうして告げられたのが、その衝撃の知らせであった。

茶香の取り落とした弓が、ごん、と音を立てた。

前にいた若子を押しわけ、茶香は靴を脱ぐ間も惜しんで、母の眠る部屋と走った。

「母さん！」

ばん！と勢いよくふすまを開くなり、部屋へ駆け入る茶香。

戦支度を解きもせず、砂と埃と血に汚れた姿のまま、やってきた娘の方を見て、

「おかえりなさい」

竜香はゆっくりそう言った。

「待つていました……」

力ない微笑。

母の布団のすぐ隣に、糸が切れたように座り込み、茶香は勢いを無

くした。

「母さん……」

今にも泣きそうな娘の姿を、困ったように母は見上げた。

「本当にあなたが立派になって、私は嬉しいのよ。

だから、そんな顔はしないで。

役目が、終わっただけなのだから」

唇を噛み、茶香は涙をこらえ、無理に笑った。

「だから、恥ずかしいってば」

娘の姿に幸せそうに微笑む竜香は、続いてやってきた、襖に手をかけ立つ影香に

「吉報、待っていましたたよ」

と告げ、僅かに微笑した。

「巻物を、一つ、手に入れました」

現香が告げた。

「そう……良かった」

若子は、涙をこらえ震えるばかりで、言葉にならない。

「イツ花……世話をかけましたね」

竜香は、部屋の隅に控え、今まで必死に自分の世話をしてくれていた、イツ花をねぎらった。

イツ花は口元を押さえ、無言で左右に首を振った。

ふう、と竜香は深い息をついた。

お手間をかけて すみません

もうちょっとで ゆきますから……

一同を迎え、満足したように笑った竜香は、そう言って両目を閉じた。

「何言ってるの、母さん!？」

母さん、駄目ええ!!!」

溜まりかねた茶香が、母に縋りついて叫んだ。

悲痛な声が、きんと冷えた外の空気に鋭く響いた。



<行鳥家交神の間>

イツ花が居間にわが子を連れてくるのを待ちきれず、若子は交神の間に一人たたずみ、今か今かと対面の時を待ちわびていた。

そわそわと落ち着きなく、正座の体勢から何度も腰を浮かせ、座りなおす。

何度それを繰り返した頃だろうか。

からり、と襖が開き、

「あら、若子さま」

と言うイツ花の声が、とうとう若子の耳に届いた。

勢い良くそちらを向いた若子の視線が、イツ花を通り過ぎ、その後ろの子供へと飛ぶ。

立ち上がった若子はそのままの勢いで、イツ花を押しつけ、わが子をその胸に抱いた。

「待ってたわ！

私があなたのおかーさんの若子よ！」

そう告げる若子の胸で、抱きすくめられた幼子が苦しげにもがいていた。

その額があたる、豊満な若子の胸が、かすかな違和感を感じた。

開放したわが子。

若子と同じ緑の髪を無造作に後ろでまとめ、同じくそっくりな赤い目をしていた。

しかし顔は若子には似ず、こちらは父に似たのだろう、将来逞しく成長することを容易に想像させる、りりしい顔立ちをした男児だった。

その額に、さらに自分とは全く似ていないものを見つけ、若子は首を傾げた。

「角？」

タタラ場には鬼が住むといふ。

そう考えれば、製鉄の神である黒鉄右京の子に、角があるのもそう可笑しな話ではないかもしれぬ。  
しかし。

その子を一目見た茶香は、一瞬の後、叫んだ。

「さすが、若子姉えの子！」

「どういう意味よ！」

普段はこの従姉妹の勢いに押されがちな若子も、さすがに抗議の声をあげた。

「どういう意味ってそりゃあ・・・」

わざとらしく視線をそらす茶香。

人並みはずれた若子の体力を、暗にほのめかす。

「茶香！」

泣きの入った若子の抗議に、きゃあ、勘弁！と茶香は戸惑う現香の後ろに隠れた。

驚いた様子でばちばちと目をしばたかせる幼子に、影香は屈みこんで視線を合わせた。

「兄さん以来の男の子ね。お名前は？」

「しきよー」

小さな男児は、まっすぐに当主を見つめ返し、もらったばかりの名を名乗った。

茶香に猛抗議していた若子が、その声に振り返って、

「若い京と書くんです」

頬を染めて叔母に話した。

今生まれ変わろうとしている京の町を支える子となるように。

「そう、良い名ね、若京」

幼子は勢いよく頷いた。

周囲をゆっくりと見回した現香が、

「まるで獅子の群れのようにですね」

とどこか飛んだ感想をもらった。

1020年3月 後編(前書き)

ゲーム「俺の屍を越えてゆけ」のプレイ記録を元に物語風に書き  
つづった物です。

<春の選考試合に沸く京の都>

その月、夏の選考試合で見事優勝を果たした行鳥家は、優秀な討伐隊のみ招かれる、春の選考試合に参加していた。

底の知れぬ瞳をした不思議な魅力を持つ影香。

女性らしい豊満な体ながらあどけない表情をした若子。  
生き生きと瞳を輝かせ、魅力的な唇に笑みを刻む茶香。

母譲りの聡明な瞳を伏せ、秀麗な表を下げる現香。

4人は膝をつき、その場に控えた。

「春の選考試合優勝は、行鳥一族じゃ！」  
響く帝の声。

見目美しく若い女性たちの勝利に、地を揺らすほどの喝采が沸く。

幼い若京は瞳を輝かせて、家族の雄姿に観覧席から身を乗り出した。

「おかーさん！おかあさん！」

嬉しさの余り大声で自分を呼ぶ息子に、頬を染めて若子は手を振った。

しかし。

それを見た周囲が、若京の角を見てこそこそと囁くのを。

8月の選考試合でまだ幼かった茶香を見ていた者が、訝しげに眉を顰めるのを。

一族の者は誰も気づいてはいなかった。

それがどんな影響を及ぼすかも、考えの及ぶところではなかったのである。

選考試合で得た賞金を持ち、影香と現香、そして茶香は、早速京復興のため、町に出ていた。

若子と若京は、家で訓練を行っている。

馴染みの棟梁の元へ向かった三人は、そこで思いもしなかった話を聞くことになる。

「おりゃああなたの母さんから知ってるからそんなこと思っちゃいない。

だがな、よく知らない奴らにとつちゃあ、いい話のネタなんだろう。

あんたたちの家のよくない噂が流れてる」

言いにくそうに、そう教えてくれた棟梁に、茶香が目を丸くする。

「なにそれ！どんな噂よ」

影香は、無言であった。

いつか起こるだろうと、彼女は読んでいた。

「あんたたちは、呪われた鬼の一族だと」

怒りの余り、茶香は絶句した。

現香は表情さえ変えず、真顔のままだった。

「なにそれ！何よそれ！

逆じゃない！私たちは鬼を狩って、京を守っているのよ！」

「落ち着きなさい、茶香」

棟梁に詰め寄る茶香の肩を押さえ、影香は静かにいった。

「だって！そりゃあ呪われてるけど！普通じゃないかもしれないけど！」

茶香の脳裏に、若くして亡くなった母の顔が、額に角を持ち生まれ た若京と、その名の意味を頬を染め語る若子の顔が浮かんだ。

「私たちは・・・」

どこか痛そうな顔をした棟梁の、服の襟をつかんだ茶香の手が、力を失った落ちた。

「すみません」

涙をこらえ、唇をかんだ茶香の肩を抱き、影香は頭を下げた。

「教えてくださって、ありがとうございます」

母の声にあわせ、無言で現香も頭を下げた。

「いや、すまねえ。こんなによくしてもらってるのに、噂ひとつ止めれねえ。恨むんならいくら恨んでもらっても構わねえよ」

胡坐をかいたまま両手を脇につき、頭を下げる棟梁に、いつもどおりの静かな声音で影香は告げる。

「どうか気にしないでください。」

予想できた、事ですから」

はっと顔をあげ、自分を見つめる茶香の肩をつかむ手に、影香はわずかに力を込めた。

1020年4月(前書き)

ゲーム「俺の屍を越えてゆけ」のプレイ記録を元に物語風に書きつづった物です。



1020年4月

<庭に蝶舞う行鳥家にて>

麗らかな天氣に誘われ、普段道場で稽古を行う若京と若子が、この日は庭で薙刀を振っていた。

蔵の整理をする影香、現香、茶香の元にも、指導する若子と、それに応じる若京の声が届いてくる。

不用品を真面目により出す影香親子の傍で、茶香は鼻歌混じりになく色んな物を引きずり出しては眺めて楽しんでいた。

そんな中、当主が静かに口を開いた。

「今月はこの三人で行きますよ」

こくりと頷く現香とは対照的に、どこから見つけ出したものか、玩具の電々太鼓を手にした茶香が

「えっ」

と大きな声を上げた。

「だって、それじゃあ多数に攻撃できる人いないじゃないですか！」

確かに多くの敵が現れた時、大多数に一度に攻撃できる薙刀士の戦力は非常に重要だった。

しかし、影香は穏やかに答える。

「わかっているわ。でも若京の先を考えれば、少しでも若子が傍に  
いる必要があるのよ」

先月京で聞いた話を思い出し、茶香は黙り込んだ。

そして誰より自分を愛してくれた穏やかな母の微笑みを思い出していた。

「今月若子は、若京に稽古をつけてあげてね」

稽古を終え汗を拭いているとそう声をかけられ、若子は

「へ！？」

と声をあげた。

「これからは、なるべく先を考えて、誰か稽古をつけるようにした方が良いと考えているの」

叔母の穏やかな声に、疑うことなく若子はそうなんですか、と頷いた。

「若京、もう術覚えてるしね。

さすが若子姉えの・・・」

茶化しに入った茶香の言葉を

「それはもういいから」

とキツと視線を飛ばした若子が遮る。

母親になった今、さすがに年下の従姉妹に、そうそうからかわれてはいられない、と思ったのだろうか。

きやあ怖いーとまたしても現香の後ろに隠れる茶香。

「でも本当に、はじめてだよね。

出陣前に術覚えた人」

当主が頷くのを見て、若子は頬を染め、えへへと笑った。

その姿はとも一児の母には見えなかった。

<鳥居千万宮>

案の定、多数を攻撃できる者もおらず、三人だけの出撃となったこの月、一族は苦戦を強いられていた。

しかし当主の指揮の元、三人は「白浪」の併せ技で、次々と鬼を屠っていった。

技力を多く消費するこの作戦は、月の最後まで戦い抜くことはできなかったが、業ノ火の巻物と、数々の貴重な装備品を得ることができたのだった。

1020年5月(前書き)

PS版です

1020年5月

< 高い空に声吸い込まれる頃、行鳥家中庭 >

現香と若京を前に、茶香は弓を構えていた。

同じく現香は無表情に剣を、若京は緊張の面持ちで、薙刀を構えている。

そうして茶香は、弓を引き絞り、放った。

現香へとまっすぐに向かったそれを、若京は身動きもできず見送った。

驚いた様子もなく、ぴくりとも表情を動かさないままに、現香は手にした剣でもち、放たれた矢を切り捨てる。

その様を目にし、口をあんぐりと開けた若京は、視線を現香から茶香へと戻した。

その視線の先、今度は自分に向かい、振り絞られる弓。

「む、無理、無理だつて！」

慌てた若京は、薙刀を下ろし、力いっぱい手を左右に振る。

その様子を見て、茶香はため息をつき弓を下ろした。

「もー情けない事言わないでよね、若子姉えの息子が。

その角は飾りか！」

そんな無茶苦茶な、と若京は思う。

角は確かに、何の役にも立ちはしないし。

「ちよつと、若子姉え、若子ねえー！」

口元に手を当てた茶香が、居間に向かって大声を出す。

すると当主とイツ花と共に掃除中だった若子が、布巾を頭に巻いたまま縁側から顔を出した。

「何??？」

「しきよーが矢の一つも払えないって言うんだよ。

見本みせてやってよ！」

ちつともホンキで撃っちゃいけないのに、と言わんばかりに頬を膨ら

せた茶香の様子に、若子は苦笑し、

「わかった」

と飛び石に置いてある下駄を履いて、中庭へと降りた。そして息子の隣に行くと、

「ちよつと貸して」

息子の持つ薙刀を手にする。

「いいよー」

白い前掛け姿に頭に布巾を巻いたまま、若子は薙刀を構えた。

「行くよー」

軽い様子で茶香は弓を引く。

放たれた矢はまっすぐに若子の頭めがけ、ひゅんと飛び出したが、風のように動いた薙刀が、鮮やかにそれをなぎ払った。

「おー」

と思わず息子が声をあげる。

若子は思わず頬を染めた。

「じゃ連続ね」

むすりとした茶香が、返事もまたずにひゅんひゅん、と連続して弓を放ってくる。

「ちよ、ちよ、まっ」

慌てた若子はびゅん、と大きく薙刀を振るった。

向かいきた数本の矢は、一斉に薙ぎ払われる。

急なことに胸を押さえ、はあはあと息をつく若子には構わず、茶香は若京にびしと指を突きつけた。

「ほらご覧！さあ男だったら越えてみる！！」

挑戦的に笑ひ弓を構える茶香に、思わず若京もむ、と顔をゆがめ、母の手から薙刀を奪う。

「来い！」

にやりと笑んだ茶香が弓を引く。

・後にはうわあ、ぎゃあッ！という男の可愛くない悲鳴が連続して上がることになる。

訓練期間中同じ仕打ちを受けた現香が、非常に同情的な視線を若京へと向けていた。

<交神の間>

「はーいい汗かいたー！」

若京をひとしきりいび・・・訓練をつけた茶香が、汗を流した後、白い衣を纏い交神の間に現れた。

その常と変わらぬ様子にイツ花は驚いていいのか呆れていいのか少し迷う。

「えつとお・・・」

「子作りでしょ？」

あっけらかんとそう口にしてくる。

「そ、そうです。この中からお相手をお選びくださいーい」

手渡された神様の一覽に、ふーん、とかほー、とか呟きつつ、茶香は目を通す。

何やら珍しい見世物を見るかのようにだった。

思わずイツ花が額に汗した頃、突っ込む隙を与えまいとでもしたかのように、時期よく茶香がイツ花に話しかけた。

「この人にする！」

「火降り童子さまですか？」

「そうそう、なんか気い合いそうだからね」

菓子でも選ぶように気軽な様子の茶香に、いいのかなあ、とは思いつつ、イツ花は了解の意を告げる。

「それじゃあお呼びいたしますねっ！」

一歩離れ神卸しの舞を奉納するイツ花。

やはりそれも、茶香は見世物を見るようにして、興味津々に見ているのだった。

調子の狂うものを感じつつも、イツ花の舞は完璧だった。

ごう、という音が聞こえたかと思うと、足に火をつけた男が、すこ

い勢いで部屋へと現れた。

「いったいどこから走ってきたものか。」

壁に激突するぎりぎりまで、赤い髪のはがくん、と立ち止まる。

「危なかったね」

声を上げて笑う茶香。

「未熟者だけど、一つ手合わせ願います」

に、と笑う茶香に、神も笑う。

火降り童子「万事、俺っちに任せとけて！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5489/>

---

俺の屍を越えてゆけ～不敗行鳥神話～

2011年12月17日00時50分発行